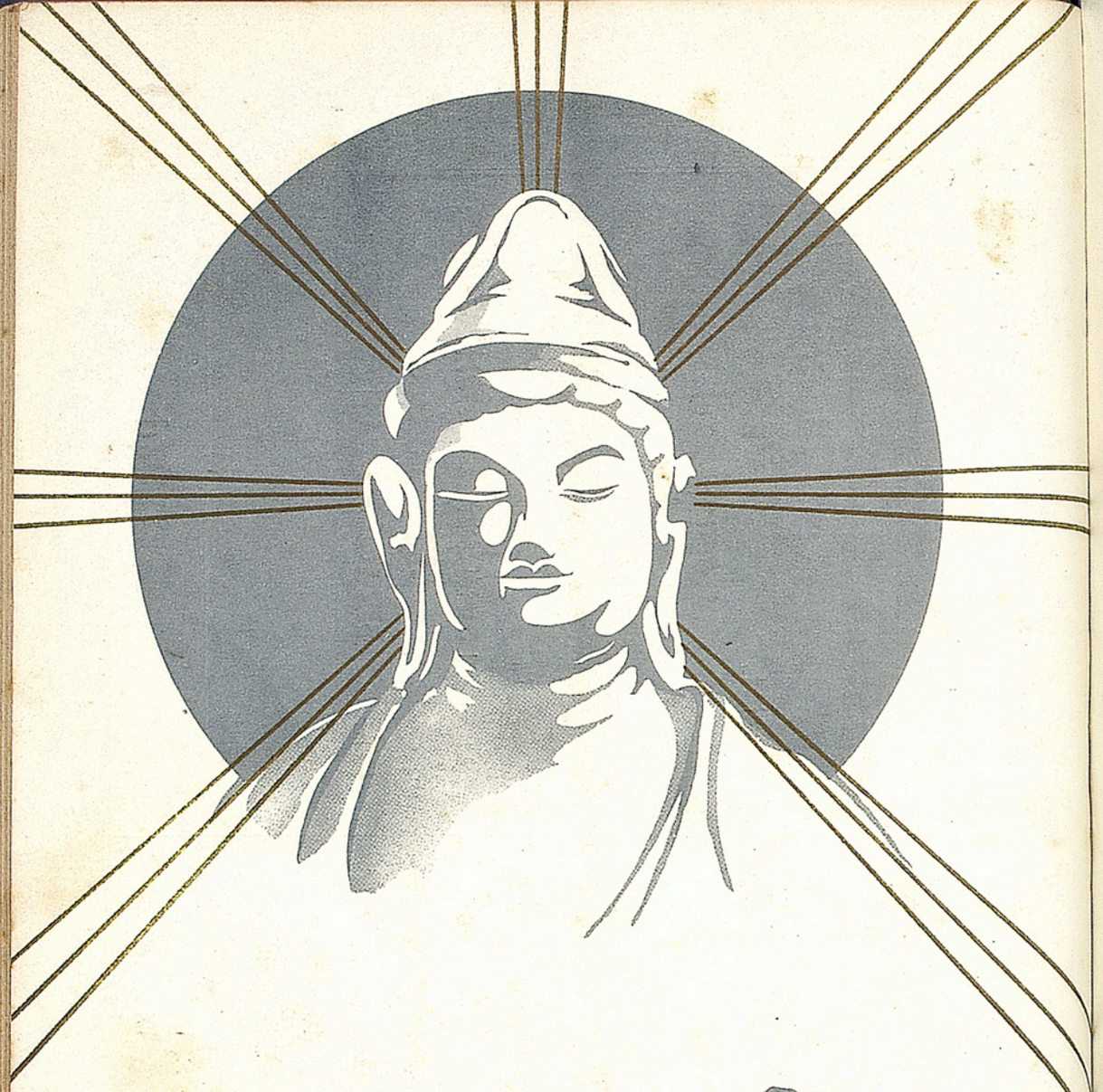

道求

第五卷　第七號

明治四十年十一月二十日（第三種郵便物認可）

明治四十一年七月一日發行（毎月一回一日發行）

求道第五卷第七號目次

求道

◎念佛　感謝

◎九州傳道◎一一皆佛恩◎四國傳道の往途　講話

◎阿彌陀佛大願業力《「執持鈔」講義の一》　近角常觀

一　第一、二兩章の大意

二　第三章　告白

◎愛兒の夭折は是れ大悲の善巧　立石仙六

雜錄

◎故中村候補生のキャンデー寺院參拜記

◎中村長谷部兩候補生哀悼書簡　窪田海軍主計中監

一　光井陸軍中佐

二

慶歎

◎眞宗慶歎　十三　善惡攝取　近角常觀

歎咏

◎再生《長詩》　甲之

◎思ふともなく《長詩》　八風

時報

◎本年の夏期講習會◎本年の夏期傳道◎其後の求道學舍

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
《本郷森川町一番地》

毎土曜午後二時
第二求道會
《九段坂佛敎倶樂部》

毎月二日午後七時
第三求道會
《日本橋堀殼町說敎所》

（七八月中休講）

九月第三日曜ヨリ開講ノ豫定

求道　第五卷　第七號

念佛

佛陀の敎法固より一也、何ぞ小乘大乘聖道淨土の區別あらん。然れども我等中心に於て、其眞味を實驗信仰すること能はずんば、忽ち律法主義のはからひに陷るが故に、遂に解脫自由の妙敎を化石せしめて、人をして桎梏動くあたはざらしむるに至る。此に於てや小乘大乘、聖道淨土の區別を生するに至る、嗚呼律法主義の羈絆痛ましき哉。信仰問題の變遷は古今同一轍、抑〻各宗の祖師、權實、偏圓、顯密等敎相判釋をなす所以のもの、決して敎理の淺深を論し、佛敎を分類せんがためにあらず、所謂廢立なるものは我佛尊しとの意に非ず、從來化石枯死せる律法主義の桎梏を破りて中心より溢れ出つる實驗信仰の淸泉を迸らしむるのみ。法然上人選擇本願念佛集に於て捨閉閣抛の文字を用ゐて、聖道門を捨て、難行道を閉ち、諸行を閣き自力を抛つべきことを極言して一寸の餘地を存ぜず。專修念佛を標榜して、南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本の一大德音を宣布したまふ所以のもの亦此に在り。法然上人當時若し專修念佛を極言したまはずんば、何ぞ師弟流罪死罪の迫害あらんや。たとひ源空を死罪に處すと雖此念佛は止むべからざる所以のもの、是如來選擇の本願は世の破戒無戒、貧窮困乏、愚鈍下劣、少聞少見、乃至罪惡深重煩惱熾盛の人を助けんがために、諸行を選び捨て、念佛一行を擇び取りたまひしものなれば也。嗚呼念佛は實驗信心の源泉より湧き出づる淸淨の智慧水也。親鸞聖人譬へて曰く、猶し湧泉の如し、智慧水を出して窮盡なきが故にと。啻に此譬喩のみならず、聖人が行卷に並へ擧げたまふ諸の譬喩は、何れも念佛絕對の佛力は我等內心に於ける諸のはからひ、諸の煩惱、諸の苦惱を破りたまふ解脫實驗の妙味を歌ひたまはさるはなし。其二三を誦せんか、曰く、善見藥王の如し、能く一切煩惱の病を破るが故に。猶し利劍の如し、能く一切憍慢の鎧を斷つが故に、勇將の憧の如し、能く一切の諸の魔軍を伏するが故に。猶し利鋸の如し、能く無明の樹を截るが故に。猶し利斧の如し、能く一切諸苦を伐るが故に。猶し善知識の如し、一切生死の縛を解くが故に。猶し導師の如し、善く凡夫出要の道を知らしむるが故にと。嗚呼これ皆律法自力の繫縛を解き

たまふ本願無碍の大道を顯示したまふに非らざるはなし、於戲。

抑〻釋尊、僧佉派の哲學に光を認めず、婆羅門諸派の苦行に生命を見出さず、遂に降魔成道の內的實驗によりて八萬四千の煩惱の繫縛を解脫して、八萬四千の大光明を放ち、大覺世尊の位に上りたまふ所以のもの、是外道の律法を排して、佛陀涅槃の實驗、人生に顯現したまひし所以に非すや。佛陀弟子の爲に此涅槃を說きて、世の苦空無常無我なるを示し、生老病死憂悲苦惱を救ひたまふ、是所謂原始佛敎の眞味に非ずや。然るに佛在世及ひ滅後の弟子律法主義を以て强て此敎を解し、人生に對して、苦空無常無我の觀をなすもの是れ涅槃なりと誤想して、未だ眞涅槃の妙境を知らず。故に人生は苦なりと觀して、未だ苦を解脫したる樂を知らず、人間は無常なりと觀せんと欲して、無常なるを認めたるの下、永久常住の境あるを知らず、是れ律法的に佛說に從はんとして、如實に涅槃の眞義に達せざるが爲也。これ無餘の涅槃と稱する所以也。聲聞、緣覺の生する所以也。遂に小乘佛敎なる律法化石の敎理を生じ來る所以也。此に於て勢此律法主義の敎理を排し來りて、涅槃の眞實驗を說きて常樂我淨の積極的妙境を示し、人生の苦を脫し、空なるを悟り、無常無我の眞光景を達觀し來る、洵にこれ如來の妙境界、無上涅槃眞如實相の靈境也。此に於てや大乘佛敎初めて起る。如來の敎法何ぞ初より大小乘の別あらむ。小乘はこれ原始佛敎の律法主義に陷りて化石せるもの、勢自覺實驗の大乘佛敎起りて佛敎の根本的改革を促し來る。これ實に大小乘の變遷が極端より極端に走り、一見殆んと氷炭相容れざるが如き面目を生じ來る所以也。今人動もすれば單に敎理を以て大小乘を論じて、妄に大乘非佛說を叫び、又大小乘の間に歷史的に漸次發展の跡を尋ねんと欲して、姑息なる調和を試みんとするが如きは、畢竟大小乘の區別は律法實驗の區別に基因することを知らざるが爲也。親鸞聖人本願念佛を稱して、一乘大乘佛乘頓敎圓敎と仰ぎたまふ所以のもの、眞に大乘の本意を顯開したまふものと謂ふべし。宜なる哉、聖德太子の日域大乘相應地とは彌陀の本願にして、勝鬘經の涅槃界、空竟法身、第一義乘とは、即ち誓願一佛乘たることやゝ。聖人涅槃經の一道淸淨も、華嚴經の無碍の一道も、畢竟本願一實の大道也と斷定して、如來一代の敎法、畢竟この盡十方無碍光如來に歸命せよとの大乘修多羅眞實功德の外なしと示したまふ所以也。

大小乘の區別が律法實驗の區別より來るが如く、聖道門、淨土門の區別亦律法實驗の區別より來る。抑〻聖道門とは大聖釋尊の敎、若し如說に修行し、如實に奉行することを得ば、是釋尊の足跡を追ふもの、固より佛敎の眞意に叶へりと謂ふべし。然れども吾人末代の凡愚、此無限無量の實行を全ふせんとす、是洵に難事也。五十二位、三僧祇百大劫、事既に難し。即身成佛、即心是佛、是亦吾人の力の企て及ぶべからざる所。況んや二百五十戒、五百戒、もとこれ如來の遺法なれど、今は却て身心を桎梏羈絆する律法主義と化し去るを奈何せん。是難行道の名の起る所以、自力修行と貶せらるゝ所以也。道綽禪師曰く、其聖道の一種今時證し難し、一には大聖を去ること遙遠なるに由る、二には理深く解微なるに由る、是故に大集月藏經に曰く、我末法の時の中、億々の衆生行を起し、道を修し、未だ一人も得る者あらず、當今は末法、現にこれ五濁惡世なり、唯淨土の一門のみありて通入すべきの路なりと、これ律法主義に陷れる聖道門を排して、淨土易行他力の一門を開き來れる實驗にあらずや。吾人末法底下の凡愚、敢て大聖の道を辿ると言はんや、唯佛を念すべし、佛の淨土に往生すべし、佛の本願力を信すべしと。これ選擇集の劈頭直ちに道綽曇鸞の實驗を說きて聖道自力の律法に對して捨閉閣拋を勸め、專ら本願念佛の一行を大音宣布したまふ所以也。

吾人若し念佛の歷史に泝らば、夫れ遙かなり。近くば良忍上人融通念佛を說き、一行一切行、一切行一行、一人一切人、一切人一人、是名他力往生といふや、既に華嚴普賢行願品に依りて、一切の諸佛を彌陀一佛に攝し、一切の行法を念佛の一行に融通し來る。既にこれ平安佛敎の律法を破りて、念佛實驗の曙光をあらはし來る者。然れども、觀念と稱念と相雜る者。叡空上人は良忍上人の弟子也。法然上人幼年叡空上人に就きて『往生要集』の、觀念主義を主とするを聞き既に疑を懷きたまふ、以爲らく、序文既に予か如き頑魯の者豈敢てせんや、此故に念佛の一門に依るといふ、何ぞ觀念の念佛ならんやと。夫れ觀念は十界一如の理を觀し、三十二相八十種好を觀する者、豈凡愚の能く爲す所ならんや。法然上人幼年既に觀念を排して稱念を主張したまふ所以の者。觀念律法の自力を排して、他力敬虔の稱念に光明を見出したまひたる也。然れども未だ最後の確信を見出したまはず。遂に四十三歲善導大師の散善義を繙きて、一心專念彌陀名號の文に接し、

順彼佛願故の五文字を見出したまふに及びてや一心覈證の時、初めて淨土門の基を開き、人生初めて選擇本願を示したまふ。彌陀の本願既に諸行諸善を選び捨て、念佛一行を撰び取りたまふ。吾人聖道自力諸善萬行を捨閉閣抛するの所以のもの、一に彌陀の選擇本願に信順するの外なき也。此に於てや、諸善萬行、戒律、觀念、乃至起立塔像、飯食沙門、孝養父母、奉事師長に至るまで、根本的に律法主義を覆へして、五逆十惡極惡最下の凡愚を救攝したまふ本願他力涅槃醍醐の實驗を宣說したまふ也。

嗚呼律法主義の羈絆は、永久に求道者を桎梏して、自力の捨て難きを歎かしむ。かくの如き他力念佛も、我彼の本願に順して稱念せざるべからずと思へるの時、既に律法主義の念佛となれり、本願に順して稱へざるべからずと思念するの時、念佛亦自力の念佛となれり。念佛は稱へんと欲して稱ふるに非ず、本願を信ぜは稱へざるべからざるなり。抑〻念佛は我等より企て如來に歸命するに非す、如來本願招喚の勅命に歸する也。發願回向といふは我等發願して如來に向ふに非ず、我等念佛して如來に回向するに非ず、如來既に發願して衆生に行を廻施したまふ也。念佛は行者の行に非す、行者の善に非ず、如來我等かために選擇したまう大行也大誓也。我等は此勅命に歸命すべし、此選擇本願に信順すべし。是れ計はずして稱へられ、自然に溢れ出つる念佛也。是れ親鸞聖人が律法主義の念佛を排して實驗の信樂を示したまふ所以也。歎異鈔に曰く、彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生を遂ぐるなりと信じて、念佛申さんとおもひたつこゝろのおこるとき、攝取不捨の利益にあつけしめたまふなり。又曰く、親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすへしと、よきひとのおほせをかうむりて、信するほかに別の仔細なきなり、と。念佛してたすけらるへしとの仰を信じたる一念、豈念佛申さんと思ひたゝざるべき、是豈他力大行の催促に非ずや。感謝報恩の念佛に非ずや。和讃に曰く、彌陀の名號となへつゝ、信心まことにうるひとは、憶念の信つねにして、佛恩報するおもひありと。念佛のみならず、吾人信後の行皆是如來願力の成就する所聖人二門偈に五念門の行、皆願力成就なることを示したまふ。是れ五念門は吾人修養の律法にあらずして、皆如來大悲の賜なるを示したまふものなり曰く「如何か禮拜する、身業に禮したまひき。阿彌陀如來の正徧智諸の群生を善巧方便して、安樂に生するの意を爲しめたまふが故に」と。嗚呼吾人至心に合掌して如來に歸命禮拜するに非ず、是既に業に如來不可思議兆載永劫に菩薩の行を行したまふとき、我等が爲に身業に禮したまひし大悲、今正に我等に達して、如來矜哀善巧の催によりて初めて如來慈父の膝下に禮拜する也。是近門也との謂に非ずや。曰く「如何んが讃嘆する、口業に讃したまひき。名義に隨順して佛名を稱せしむ。如來の光明智相に依て、如實に修し相應せんと欲するか故に。則ち是れ無碍光如來の選擇攝取本願なるが故に」と、嗚呼吾人口に稱名念佛する所以のもの、我等初めて如來を呼ふに非ず、如來既に業に選擇本願を立てゝ、南無阿彌陀佛の念佛を以て吾人を昭喚したまふ也。吾人其名義に隨順して初めて如來大慈父の德號を讃嘆して、感謝の誠を捧くるの時、正にこれ二尊の勅命に信順して、如來の愛子として光明の慈懷中に攝取せらるゝ也。此に於てや、同一念佛四海兄弟の大會衆の數に入るの門也。後の三門亦準知すべし、曰く「如何人か作願する、心に常に願じたまふ」。曰く「如何人か廻向したまへる、心に常に作願したまひて、苦惱の一切衆生を捨てたまはすして、廻向を首として、大悲心を成就することを得たまふか故に功德を施したまふ」、と。此の如き如來願力の成就によりて、蓮華藏世界の如來慈父の宅門に入りて、種々法味樂の屋門に入り、遂に生死の園、煩惱の林に遊戲して、敎化地に出て還相の廻向の利益を得るなり、此の如きの五念門一として吾人自力經營の律法に非ず。入出二門自利々他の功德一として如來大悲願力の淵源より廻向したまはざるはなし。是實に如來の加被力也、大悲廣惠力也。二門偈に曰く「婆藪槃頭菩薩の論、本師曇鸞和尙釋したまへり、願力成就を五念と名く、佛よりして言へは宜しく利他と言ふべし、衆生よりして言へは他利と言ふべし、當に知るべし、今將に佛力を談せんとすることを」。和讃に曰く、「天親菩薩のみことをも、鸞師ときのべたまはずは、他力廣大威德の、心行いかてかさとらまし」聖人私淑して自ら親鸞と名のりたまふ。洵に聖人は是れ本願他力圓頓一乘の大信大行の權化と鑽仰し奉る可き也。

一、日比しれるところを普知識にあひてとへば德分あるなり、しれるところをとへば德分あるといへるか、殊勝のことはなりと、蓮如上人仰せられ候。不レ知處をとはゝ、いかほと殊勝なることあるへきと仰られ候。

一、聽聞を申も大略我ためとはおもはす、やゝもすれば法文の一ゐもきゝおほえて、人にうりこゝろあるとの仰ことにて候

（蓮如上人「御一代聞書」）

感謝

九州傳道

四月八日福岡大學に於ける釋尊降誕會を初として、熊本、坂梨、玉來、竹田、岡本、大分、別府、日出、高田、封戸、四日市、中津、友枝、松江、添田、犀川、行橋、大隈、小倉、大川、長崎、武雄附近に至るまで、凡そ一ヶ月間、同朋同信の方々の渥き惠みに浴しつゝ、如來選擇の願心を仰ぎ奉りしは、即是れ大聖矜哀の善巧より起さしめたまふ所、洵に感謝に堪へざる也。殊に九州傳道に於ける唯一の賜は、到る處御同朋御同行の同一念佛して、四海兄弟の名のり高くあげたまへることなり。嗚呼念佛は無上寶珠なり、之を稱ふるもの三業を莊嚴せざるなし。恐くばこれ故七里和上の感化今猶其遺芳を留めたまふなるべし。遂如上人御遺言に曰く、

かたみには六字の御名をとゞめおく
なからんのちは誰も須ゐよ

九州御同朋と相別れてより既に三月、冀くは永久に御名を以て、千里、相交らん哉。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

一一皆佛恩

九州傳道に於て、各地到る處不可思議の御催を蒙りて、無量法味の賜を享く。一一回想し來れば、感謝胸に滿ち、肝に銘ず。皆是れ如來善巧の御手より來らざるものなし。福岡大學の降誕會は、昨年の緣を重ねて其契を深からしめんとし、熊本に於ける夜半同朋の待受は、期せずして一昨年來の法緣益々熟せしむ。阿蘇山下坂梨村に於ける青年會一席の講話は、不可思議の佛緣によりて、在監中聞法の人によりて企てられ、豐後玉來、竹田、岡本、は今回九州傳道、希望の一點火にして、殊に藤村僧翼師は東道の主人なり。相良願應師の導の下に、中學及教育會に講話す。廣瀬中佐出身の地、風光文人畫中の景也。竹田直入の出つる偶然ならんや。大分求道會は多年山崎震雷師等の御同朋の企てたまふ所、予其會所長福庵に宿し、二日間講話す。山崎師一見舊知の如く、求道學舍に歸るの感あり。監獄と高等女學校とに講話す、別府溫泉の繁昌は漸く人生の苦惱を促して、頗る求道心を高め日出の倫理教會は木下子爵の卒先によりて、眞面目の氣風を起す、高田封戸は東陽圓成師の感化によりて靡然として德風に浴す、高田雙翼會、青年大に盡力し、聽衆二千、晝夜滿堂聲を

呑むで聽く。封戸は即東陽師の寺、故圓月師の碑高く聳え、凜々として高風に接するの想あり。圓月師實踐躬行子弟門徒を師ゐ、毎朝四時より稱名念佛し法香鄕に滿つ、二日間法緣を契り、送りて村はづれの橋に待たる、車上覺えず合掌して涙下る、四日市は　院師住職したまふの別院　出立の日殊に御言を受く、郡役所所在地、求道心亦熾也、人生問題を說く、中津は寺院と中學に講話し、友枝は嘗て在舍したまひし安村曉雲君の地、新築學校に寺に法を說く、同君と見へて父子相遇の感あり。松江は眞田慶彰師の待つ所、師か母堂は七里師面授の信者、慶彰師東陽師の感化を受け、毎朝四時勤行念佛すること全く相同し。夜特に團欒怯悅極なし。聽衆幾千滿堂、同地に不思議の事多し、添田井上師の寺はこれ中村少尉候補生の寺、偶然の緣不可思議と謂ふへし。行橋は十年前有緣の地、大隈町は一昨年來法緣の契深き西原恒衛師及有田廣君の地、而して恰も有田父君我を待ちつゝありしが、前月父君逝去したまふ恰も其月忌に當る。溫き法喜三昧の好遇を受く。小倉青年會に一席の講話をなし、大川青年會にも亦講話をなし、遂に長崎に三日、午前は自然法爾章を講し、夜光榮寺に於て人生問題につきて講話す。住職正木師舊交あり、殊に三十五年歸朝の時先づ上陸したる地感慨多し。武雄亦十年以來有緣の地、最終に大內暢三氏宅にて、其一家の爲に如來選擇の願心、大聖矜哀の善巧と、人生問題信仰問題を說く。歸路故鄕に立寄り慈母を奉して五月九日東京に歸る。一一皆佛恩ならざるはなし、慈につゝしみて如來の鴻恩を謝し奉る。

釋迦彌陀は玆悲の父母、
種々に善巧方便し、
我等が無上の信心を、
發起せしめたまひけり。

四國傳道の往途

一

夏休前、最終の日曜講話を爲す。住田君の贈りたまへる執持鈔を頒ちて、覺如上人の明晰にして力强き信仰を味ひ奉る。立石君の兒を失ひて信を得たまひし告白をきく、感歎せざるものなし。午後巢鴨監獄の講話を終りて、雜司ヶ谷墓地に到り、先づ梁川氏の墓に詣で、次に死刑被告人の墓を吊ふ。新墳墓標墨痕鮮かなり、嗚呼これ、九州傳道歸京已後一月半、予をして斷腸の想あらしめたる問題なり、彼等は同一念佛の

人にして佛性開顯の再生者也。されど未だ國政は彼等に特赦の涙を注ぐことなく近時死刑厲行の露と消えたるなり。是予をして身を切らるゝの想あらしむる所以なり、噫。

九州傳道の歸路伴ひ奉りし母を奉じて故郷に安んじ、亦四國傳道の途に上らんとす。一家團欒晩餐をいたゞく。母堂白髮の前、兄弟妻兒皆健在、況んや未來、海一味なるに於てをや。感謝極まりなし。況んや雜誌後ればせながら、發送を終れるに於てをや。嬰兒母に抱かれて門に送り、破顏一笑、學舍諸君新橋停車場に送らる。暑中の清修を約して、玻窓一揖別を告げ、急行列車心地よげに飛ぶ。窓外夏木立の茂れるに、暮色蒼然として襲ひ來る。我亦母と偶坐しつゝ眠に落つ。(六月二十八日)

二

靜岡に鰻飯を買ひ、濱松にて茶を買ひ、夜食して亦眠る。窓外雨蕭々。米原にて母上を列車より送り奉る。嬰鑠として行きたまふ、兒心安堵す。有耶無耶の間に京都を過ぎ、神戸に福間達吉君の迎を受け、明石、姬路、網干に同朋諸氏に遇ひ、岡山にて下車。三蟠より連絡船に乘り、黃昏高松港に着す。同朋諸氏出迎はる。相見えて、默契神會、言ふべからざる心情相搦すべし。可祝旅館に着して、食卓を共にし、一年已上の積る話滾々として盡きず。人事の變遷を顧みて、感慨措く能はざるものあり。(二十九日)

三

終夜、運命極はまれる人に大悲を說くと夢みて寤む。朝五時なり、恰もこれ學舍にて寢起の時なれば、我も亦起きて勤行をなす。心すがすがとして淸新極りなし。午前中聖敎を繙きて、ます〳〵聖人の讀書眼の、全く信仰眼もて徹鑒したまひしを仰ぎたてまつる。慧眼見眞と鑽仰かぎりなし。午後會場福善寺に着すれば、庭園淨くして纖塵を留めず、床間、花麗はしく香烟室に薰ず、感謝の念佛、口をつきて出づ。正二時開講、前講には二門偈、後講には聖德太子の十七憲法を說く。講後日西に落ち、晩涼人を蘇らしむ、久しぶりに心閑なるを得て、食後街頭を散步、佛具を索む。祖釋の甚深微妙なるを味へは味ふほど、底のしれぬに心醉ふばかりなり。あゝ之れより幾十日間、如斯くして如來は各地同胞の間に大法を愛樂せしめ給ふ。行く處は凡て是れ佛日普照の地、遇ふ人は凡て是れ同一念佛の兄弟也。感謝何ぞ限らん。滿足しつゝ寢に就く。(三十日)

講話

阿彌陀佛大願業力

(執持鈔講義)

—(求道學舍日曜講話)—

近角常觀

本講話は前後二回に亙りて『執持鈔』一部の大綱を講述したるものなるが、其第一回一二兩章の分は筆記の用意なかりし爲め、餘儀なく第二回の分のみを掲載する事としたり。讀者幸に之を諒せられん事を。

一 第二章の概略

今日は『執持鈔』のお話を致します。此の前の時に第二章迄は大略御話致して置きましたから、今日は第三第四第五の三章を申します。殊に今日からは地方傳道に出掛けますので、來月の中頃迄は東京の方は暫く留守に致します。夫であるから、今日は少しく時間を早めて、ゆつくりお話致し度く思ふた次第であります。猶ほ又今日は最終日曜の事であるから、例の如く講話後信仰談話會をも開き度いと存じます。

偖て此の前の時は、第一第二の兩章に就いて、親鸞聖人が法然上人の念佛の敎化を、どんなに深く信じ喜ばれたかを申した事でありました。既に前回の講話をお聞き下された方には申す迄も有りませぬが、ざつと一言繰り反せば、第壹章は佛の對絕の大悲、即ち第拾八願は、十方衆生有りと有る者、設へ如何なる極惡罪人でも我が淨土に生れんと欲する者は、必ず救はにや措かぬとある廣大のお惠みである。而して此の廣大なお惠みを承はつて、「あゝ有り難い」と頂いた一念に、攝取不捨の利益に預けしめ給ふのである。夫であるから一念如來の光明に出合はせて頂いた時は、——光明に出合はせ頂くといふも、外では無い、佛の十方衆生に向はせらるゝ平等の大悲は、即ち自分自身に向つて居て下さるのであると、氣の附いた一念であります。光明に遇ふ遇はぬ、信仰を得る得ぬ抔と申す時は、大變際立つて聞えるが、さうではない。我々が佛の大悲に氣附かせて頂くのは、光明の御照によつていつとなく漸々に氣附かせて頂くのである。而して其最後に「斯の如き廣大のお惠みであつたか」と、中心より眼の醒めた一念が、攝取不捨に預かつた時であります。攝取不捨とは佛陀が、我々衆生を此の惠みに氣の附いた一念に、永久に攝取して捨て給はぬ事である。其處で斯の如き廣大の御惠みであれば、一度び之に氣が附いた已上は、もう二度と迷ふ事は無い即ち此の一念に正定衆と言つて、必ず淨土に生れさせて頂く人數の中に加へて頂くのであります。併し之は何も我々が此時信仰に入つたからといふ譯ては無く、實は初より佛陀は我々の爲に、此の廣大の慈悲を以て、向つて居て下されたのである。けれども我々の方て、今迄之に氣が附かず、迷うて居たもの故、此の時迄自分が此れ程廣大の慈悲に預かつて居る如來の愛子てある事を知らなかつたのてあります。さて彌々正定衆の數に加へて頂いた時は、もう此時既に佛と親子の名乘りが附いたのである。一體信仰を人に話すといふのも、佛

の親より御覧なさる時は、十方衆生皆な同一に可哀いので、其間に誰れ彼れの差別は寸毫も無いのである。唯其中で、一日早く惠みに入り、親子の名乗りの附いたものが、未だ名乗りの附かぬ人に向つて、「此の惠みを喜ばうでないか、貴君はまだ氣が附かぬが、佛の親は昔よりお互の爲に心を碎いて居て下さるのである」と話する事に外ならぬのであります。そして彌々諸共に惠みを喜んだ時は、所謂四海兄弟、同一念佛の同胞と爲て頂いた時である。偖て斯く惠みに氣が附いて、正定聚の數に定めて頂いた上は、最早や決定往生の身上である。必ずしも臨終を待つ事もなければ、又來迎をたのむ必要も無いのである。

之に就きて昨日私は、彌々今度地方傳道に出かけますに就き、此の一ヶ月間色々と心配した例の死刑囚の人々に、是非一度話し度く思ひまして、監獄へ參つたのであります。そして其の氣の毒な人達に話しました處、何ういふ譯か昨日は或人々は色々と心中を打明けて話される。私も大に感じた事でありました。其一人の如きは、中心より一代の間違いを悔ねて、人と生れた甲斐が無いと悲しんで居る。甚しきは、窓に鳴く鳥の聲を聞く度に、自分の運命を知らすかと思ふと、斷腸の思ひに耐えぬと言つて居る。其處で私は「成程人情としてはお前の言ふ所一々無理が無い、又人間としての上から云ふも一々尤である。けれども、一つ氣附かして貰はねばならぬのは佛の大慈悲である。佛陀の親は我々の罪の如何に係はらず、我々を平等に哀れんで居て下さるのである。我々は此の御惠みに氣附かせて貰はぬ事には、永劫の迷を離るゝ事が出來ぬのである。今お前は人と生れた甲斐が無いといふが、此のお惠みに氣の附くが、人と生れた甲斐では無いか。高い位に登る事が必しも人生の目的ぢや無い。又富や健康や乃至家庭を作ることが人生の目的でも無い。唯佛の親が居て下さる事を解うせて貰ふ事、是れ一つが人間と生れた目的である。夫であるから何よりも此のお惠みを喜ばせて頂くがよい」と言ひ聞かせました。すると何時もとは樣子を變へて、能く聽いて居る。そうして「私は一昨夜刑の執行を受けた夢を見ました」と言つて、其の樣子を細々と話しをする。夫れが實に能く明了に覺えて居るのであります。何んでも誰れか若い男が自分の前にやられて、次に自分がやられたと言つて居る。そうして「ハッと目が醒めると、何んとも言へぬ不思議の感がして、今迄の胸のもや〳〵は一邊に消えて仕舞ひ、實に言ひ知れぬ爽かな心持になつた。何れ近日中に之が事實に顯はれると思ふと、涙の限り泣けると言つて居る。之を聞いて私の申したには「豫てより言ふ如く、目に一丁字なき者でも、誰れでも頂れるは彼のいろは歌である。――色は香へど散りぬるを、吾が世誰ぞ常ならむ、有爲の奥山今日越えて、淺き夢見し醉ひも爲ず、――此のいろは歌にも「淺き夢見し醉ひもせず」とあるでは無いか。即ち我々は今度彌々有爲の奥山今日越えて、淺き夢見ず醉ひもせず、無爲涅槃の都に入らせて貰ふのである。抑此人生が一場の夢である。其人生に我々が何んの彼の苦して居るのは、是れ又無明の酒に醉ひ伏して狂亂を演して居るものである。處が茲に阿彌陀佛の廣大な本願があつて、此の本願のお力で、罪惡の我等なれども、

彌々今度は夢、醉の目が醒めて極樂に行かせて頂くのである。夫であるから、先づ夢を考へて見るが善い。今お前は夢に刑の執行を見て悲しんで居るが、夫も醒めれば一場の夢に過きなかつたでは無いか。此の世が又矢張り其の夢なのである。我々は日夜にあゝかうと心配して居るのであるが、彌々極樂に行き目が醒めて見れば、是又一夜の夢に過ぎぬのである。故に何彼は捨てゝ、先づ此のお惠みを喜ばせて貰ふかよい」と申し聞かせた。以前ならば斯んな事、決して聞いて居られる人間では無いのであるが、昨日は何故か一々能く解ると言つて、非常に喜んで聞いて居る。私も其の樣子を見て我を忘れて話したのであります。

其の中に段々時間に遲れ來た。けれども今の夢の若い男といふが、どうも氣懸りでならぬから、又引き返して或る若い男の監房を訪ねて見た。此の男に話したのは、此の『執持鈔』の第二章であります。「此第二章に親鸞聖人は如何に仰せられてあるか、といふに、

故聖人のおほせに、源空があらんところへゆかんと、おもはるべしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへまゐるべしとおもふなり。

とあるではないか。抑々我々凡夫が如何に考へた處で、此佛意の不思議が解かる筈はないのである。即ち

往生淨土の爲にはたゞ信心をさきとす。そのほかをばかへりみざるなり。往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし。すべて凡夫にかきらす、補處の彌勒菩薩を初として、佛智の不思議をはからふべきにあらず。まして凡夫の淺智をや。かへす〳〵如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり。

（「執持鈔」第二章初めの文）

の抑せ通りである。併し今自分はお前の運命に居て言ふのでないから。或は我が言ふ事がお前の心には適切て無いかも知れぬ。けれども今私の頂いて居る所は、唯廣大のお惠みである、佛本願の御親心である、南無阿彌陀佛の一つである、之を聞き之を仰き之を喜ばせて貰ふ外に私の心は何物も無いのである。又茲に法然聖人は「源空があらんところへゆかんとおもはるべし」と言つて下さるでは無いか。其の法然聖人の御信心は、唯彌陀の本願に從つて南無阿彌陀佛々々々と喜ばせて貰ふ外には、何も無いのである。されば我々も此の御化導に從つて本願を喜び念佛を稱へさせて頂く時は、設へ何處へ行くとも、必ず法然聖人のお出になる處へ行くのである。親鸞聖人の御信心も、今此の御文にある如く法然聖人の此の御教化を承はつて「……と、たしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへまゐるべしとおもふなり」と頂かれたに外ならぬのではないか。親鸞聖人が斯く頂かれた所以のものは、即ち次に、

このたびもし善知識にあひたてまつらずば、われら凡夫、かならず地獄におつべし。

といふ一方に退引きならぬ處があるからである。即ちお互が今現に其の境遇に居るのでは無いか。自分に何か悟らうと思うても悟れるでは無し、あゝ凭うと思てる中に刻々死の時は

迫つて來る。實に何とも仕樣の無き場合である。然るに今其の矢先きに當りて不思議にも善知識の化導によつて、彌陀本願の一道をうけ玉はる事が出來たのである。人生是程嬉しい事はあるまい。親鸞聖人は其時の心持を次に何う言はれたかといふに、

しかるにいま聖人の御化導にあづかりて、彌陀の本願をきゝ、攝取不捨のことはりをむねにおさめ、生死のはなれがたきをはなれ、淨土のむまれがたきを一定と期すること、さらにわたくしのちからにあらず。たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが、地獄の業たるをいつはりて、往生淨土の業因ぞと聖人のさづけたまふに、すかされまいらせて、われ地獄にをつといふも、さらにくやしむおもひあるべからず。そのゆへは、明師にあひたてまつらでやみなましかは、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて、惡道へゆかばひとりゆくべからず、師とゝもにをつべし。さればたゞ地獄なりといふとも、故聖人のわたらせたまふところへまゐらんとおもひさだめたれば、善惡の生所、わたくしのさだむるところにあらずといふなりと云云。

(之は此の前に話した通りでありますが、今茲には實際死刑の刑の前で言ふのであるから、是れ程適切な事は無いのであります。)——今お前は信仰を得る得ぬなど、そんな余裕のある身ぢや無いて無いか。口には何と言つてるか知らぬが心の底は闇だらう。「往生ほどの一大事凡夫の計らふべき事にあらず、」否な計らうと思うても計る事が出來ぬ我々である。然るに唯茲に法然聖人が「南無阿彌陀佛、往生の業には念佛を以て本とせよ」と言つて下さるからは、親鸞聖人の言の如く設ひ法然聖人にだまされた處が、法然聖人のお出になる所へ行くのである。たとひ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふ所へ參るべしと思ふなり」と頂く時は、もう此上心配は無いてないか。之は何も私が思ひ附いて言ふぢや無い、法然聖人が一代經を五邊も六邊も讀んだ上での御敎化である。又親鸞聖人が眞宗をお開き下された根本も此外に無いのである。今其の御敎化に從つて、本願を信じ念佛を喜ぶばかりと頂いた上は、何處へ行くも、法然聖人親鸞聖人のお出になる所へお供するのである。設ひだまされた處が、其處へ行けると頂く上は、否ても應ても念佛を喜ぶより外は無いて無いか。又私自身の上でいふも、私が斯く頂いて居るのは、何も私に學問が有つたからぢや無い、又自分の修養の力でも無い、唯私が色々と苦しんだ爲である。苦しんだのは私が罪が深かつたからである。此點になると形こそ變れ監獄に居るお前も私も少しも違はぬ。其の罪に苦しんで居た自分が、外は無い自分を眞實に惠んで下さるは南無阿彌陀佛の親ひとりである。佛の本願は十方衆生に對する廣大のお惠みである。大慈大悲の御親が十方衆生を哀んで下さる大音宣布の御惠みが有り難い」と、法然上人の仰せ其儘を頂いた外には、一の雜り物も無いのである。だからお前も、信仰を得る得ぬ抔と六かしき事を言はずに、私の頂く處を其儘頂けばよいては無いか。お前も私も親の惠みを受けてる事は同じなのである。そうして私が喜ぶ所をお前も喜んで呉れゝば、即ち私は兄、お前は弟、

同じ御親の許に法の兄弟と爲て頂くのである。『歎異鈔』には何とあるか。

聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおほしたちける本願のかたじけなさよと、御述懷さふらひゝ。

親鸞聖人が斯く言はれたも、何も聖人一人の爲めのお慈悲といふのでは無い、即ち我々一人々々が皆此の廣大のお惠みを蒙つて居るのである。親鸞聖人は偉らいから頂かれたけれども、自分は因緣が拙ないから頂けぬなどゝ、そんな分け隔てを着けては勿體ないぢや無いか。そうして結局命終れば極樂に生れさせて頂く。——皆て本願寺の新法主が或る死刑囚の人に向つて、「自分が命終れば自分が先きに極樂にゆく、若しお前が先きに終つたなら、お前が先きに佛の國に行つて自分を待つてゝ呉れ。同じ佛の御國に行く事故、早いも遲いも構はぬぢや無いか」と言はれたと承はつて居るが、實に其の通りぢや。之は斯く言ふも言はぬも無い、明らかな言語已上の事實である。だからお互も、先きに行く者は先きに行つて待つてる事、私も何れ後から出懸けて行くのだから、何の違いも無いのである。現に法然聖人が「源空があらんところへ行かんと思はるべし」と言はれたは、「源空は先きへ行つて待つてるから、お前も後から來い」と言つてゝ下さるのぢや無いか。抑此世で我々が何んて苦むかといふに、自分と絶對に運命を同じくし、自分を絶對に同情して呉れる者が無いからである。然るに「源空があらん所へ行かんと思はるべし」とは、何たる同情のお言葉であらう。又『歎異鈔』では、親鸞聖人が法然聖人の信心と自分の信心も一つであるとお喜びなされた時、外の方が之に異議を稱へられた。其の時法然聖人のお言葉に、

源空が信心も如來よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も如來よりたまはらせたまひたる信心なり、さればたゞひとつなり、別の信心にておはしまさんひとは、源空がまいらん淨土へはよもまいらせたまひさふらはじ

と仰せられたも之てある。即ち信心の變はつて居る者は、我が行く淨土へ來る事は出來ぬけれども、同じ佛の惠みを頂いた者なら、必ず源空のあらん所へ行くと思へよ、と言つて下されたのである。甚だ無遠慮のやうなれども一點飾りの無い處——己れの所へ來い、己れの居る所へ行くと思へ、と言つて下さるのである。けれども信心が變つたり、外に雜り物があつたりしては、行く事が出來ぬ、唯本願を有り難いと頂く一つて行かせて貰ふのである、此の世の罪の有る無しや、運命の如何は更に係はる所が無いのてある」と懇々と話して置いて歸らうとしますと、突然「先生は何處かへお出になるのか」と聞く。私も之には一寸驚いて「實は明日から行くのだ」と申しますと、「あゝ夫れては私の執行の時にはお出にならぬのか」と言つて、非常に淋しそうな風である。御存知の方があるかも知れませぬが私は實は先日來、どうも此の死刑が見るに忍びぬ上に、私の信仰上如何にしても承認出來ぬ處から、色々と心配して居たのてある。然るに其上にまた斯ういふ事を出立の間際に言はれるのであるから、何とも言へぬ心地がする。「お前が其のやうに言ふのならも一言話して行かう」と

言つて、更に話を續けた。今度は第一章を拜讀して「來迎は諸行往生にあり。眞實信心の行人は攝取不捨のゆへに、正定聚に住す。正定聚に住するがゆへに、かならず滅度にいたる。かるが故に臨終まつことなし、來迎たのむことなし。」玆が他力の有り難い所以でと話したのである。そうして「實ば私は明日から四國へ行くのであるが、豫て言ふ如く、如來本願の廣大なお惠みに氣附かして貰つた上は、此の世の命畢つてから初めて極樂へ行くので無く、お惠みに氣附いた時、既に攝取の光明中に收めて貰いて下さるのである。今斯く話す間も、現に其の光明中に居るのである。臨終は人々によりて色々であるが、夫は往生淨土の爲には何等の關係もない。生前此の惠みを頂いた者なら設ひ臨終は如何にあるとも必ず行く可き處に行くのであると、話し聞かせた。處が其男も大層滿足して呉れて、却て臨終に送るよりも、生前に遺憾なく別を告げ、有り難く監獄を去つたのであります。そうして遲れて九段の第二求道會に行つて見ると、矢張り東京監獄の伊藤君が來て、ちやんと私の代理を爲てゝ下さる。何から何迄實に有り難く頂いたのであります。

偖て今日は後三章が長い上に、斯く永々と前二章を繰り反したのは、昨日眼前に此兩章の味を事實に見せて頂いたから、皆さんに其廣大なる味を聞いて頂き度かつたからであります。之より彌々第三章に移ります。

二　第三章

一　またのたばく

光明寺の和尚(善導御こと)の大無量壽經の第十八の念佛往生の願のこゝろを釋したまふに、善惡凡夫得生者、莫不皆乘、阿彌陀佛、大願業力、爲增上緣といへり。このこゝろは、善人なればとて、おのれがなすところの善を以て、かの阿彌陀佛の報土へむまるゝこと、かなふべからずとなり。惡人また申すにやおよぶ。已が惡業のちから、三惡四趣の生々ひくよりほか、豈報土の生因たらんや。しかれば善業も要にたゞず。惡業もさまたげとならず。善人の往生するも、彌陀如來の別願、超世の大慈大悲にあらずは、かなひがたし。惡人の往生、またかけてもおもひよるべき報佛報土にあらざれども、佛智の不思議なる奇特々あらはさんためなれば、五劫があひだ、是れを思惟し、永劫があひだ、これを行ゝて、かゝるあさましきものが、六趣四生よりほかはすみかもなく、うかむべき期なきがために、とりわきむねとおこされたれば、惡業に卑下すべからず、とすゝめたまふむねなり。されはなのれをわすれて、あふぎて佛智に歸するまことなくんば、なのれがもつところの惡業、なんぞ淨土の正因たらんや。すみやかにかの十惡五逆四重謗法の惡因にひかれて、三途八難にこそしづむべけれ、なにの要にかたゝん。しかれば善も極樂にむまるゝたねにならざれば、往生の爲めにはその要なし。惡もまたさきのごとし。しかれはたゞ機生得の善惡なり。かの土ののぞみ、他力に歸せずは、おもひたへたり。これによりて善惡凡夫のむまるゝは、大願業力ぞと釋したまふなり。增上緣とぜざるなしといふい、彌陀の御ちかひのすぐれたまへるに、まされるものなしとなり。

前の第一章は攝取不捨の理はりを說き、第二章は法然聖人の一言の御敎化を飽迄信じ喜はれた親鸞聖人の信仰をお說き下されたものである。而して今此章は、佛の廣大な御惠みは、善惡の區別無く皆な平等に助けて下さると、いふ事を力强くお說き下されたものである。殊に此の章は第拾八願の眞髓をお示し下されたものとして、頗る肝要な章であります。

凡そ世の中の人は、一般に、善をすれば助かる、惡をすれば助からぬと、する事の善惡によりて結果の如何を考へるのが

多いのである。之が所謂因果の道理であります。處が之は世間普通から言へば善いかも知れぬが、信仰の上から言へば、實は大なる邪見に落ち入つたものと言はねばならぬのである。といふものは設ひ此の因果の道理を信じたにしても、我々が絶對に善は出來る、惡は止められるかと云ふに、迚も夫は出來ぬのである。既にそうだとすると、若し善をした者は助ける、惡をした者は助けぬといふお惠みならば、迚も我々は助かる見込が無い事になる。處が之が甚だ何でも無いやうであつて、實際は取り違へて居る人が尠くないのであります。其處で今此の章は特に善導大師の『玄義分』の文を引いて、善も往生の爲にならず、惡も往生の妨げにならぬ、といふ事をお示して下されたが一章の眼目である。

先づ初めに善導大師のことを、光明寺の和尚と仰せられたは、善導大師が光明寺といふ寺にお出なされたからであります。其の善導大師の『玄義分』の文に「一切善惡の凡夫、生を得る者は、皆な阿彌陀佛の大願業力に乘じて、增上緣と爲さざるは無し。」と言はれた。之は簡單に申せば、善人でも惡人でも外の事では助からぬ、唯阿彌陀佛の大願業力一つで助すかるのである、といふ事を御示し下されたのである。其處で此の味はひは何うかと申しますに、抑々我々は凡夫の小さな考から善人とか惡人とか區別して言つて居るのであるが、大慈の親の眼から御覽下さる時は、善人も惡人も無い。唯是れ出來の善い子供と、出來の惡い小供とである。設ひ其子供の出來が善からうが惡からうが、之を哀れんで下さる親心には、少しの變はりも無いのである。否寧ろ親の心から言ふ時は、出來が惡ければ惡い子程、彌々其子が可哀いと呼んでゝ下さるのである。此が佛陀の廣大なる親心である、大願業力の御惠であります。

偖て其の廣大の御惠みて我々が助けて頂く時は何うかといふに、設ひ出來の善い子供でも、自分が善い事をするから、親が助けて呉れると思うて居る間は、まだ親の眞實の惠みは頂けて居無いのである。世間の上でも子供が親の許に出かけるに、自分は善い事を爲るから、といふ考で行く間は、親の御恩は全く頂けて居無いのである。夫では未た本當に親の許に歸つたとは言へぬのである。然らば何うした時が眞實親の惠に氣が就いたのかといふに、「自分は今迄善い事が出來ると思うて居たが、之は非常な間違てあつた。自分の力で出來た事は一も無い、何も彼も皆な如來廣大のお導きであつた。深重の御恩て有つた」と氣が附いた瞬間が、即ちお救ひに預つたのであります。又惡人にしても、口には本願が有り難いと言ひながらも、心の底て自分のやうな惡人は迚もお救ひには預かれぬと言つてる間は、佛の親は決して滿足はなさらぬのである。親は其のやうな惡人おやから、彌々救はずにや居られぬと呼んで、下さるのである。其の切なる親の慈悲心に目が醒めて、「今迄自分て彼是れ心配して居たは、實に相濟まぬ事であつた、佛は夫程迄に此の惡人を愛して、下さるのて有るか、有り難い」と、今迄の淺間敷い心も打忘れて親の惠みを喜んだ時が、救ひに預つた時であります。併しながら斯く言へばとて、自分の惡を懺悔せにや親の許へ行かれぬと申すのぢや無い。が之は寧ろ親の惠みを眞實頂いた時は、如何な

る者でも今迄の間違を懺悔せずには居られぬのである。斯の如く親は我々衆生を善惡の區別なく、皆な平等に愛して下さる。夫であるから衆生も亦善惡の區別なく、皆一樣に此のお惠みを頂く事が出來るのであります。

さて一旦親の御恩に氣が附いてからは、どんな立派な人間でも、又どれ程の惡人でも、例へば監獄に居る人達でも、此の親の惠みを喜ぶ心に、少しの變はりも無い。即ち度々言ふ事であるが、信の一念に四海の中皆兄弟として、善惡の區別なく皆な平等に助けて下さるのであります。其處で此の章の初めには先づ

このこゝろは善人なればとて……しかれば善業も要にたゞす、惡業もまたさまたげとならず、善人の往生するも

彌陀如來の別願、超世の大慈大悲にあらずばかなひがたし。

善をするから助けて下さるのぢや無い、惡をしたから妨げとなるのぢや無い、唯阿彌陀佛の大慈大悲で善惡共に助けて頂くのであると、御示し下されたのである。

猶ほも一つ進みて言ふ時は、我々のする善は、善は善であるが凡夫相對の小善である。之を阿彌陀佛の絶對の大善に較ぶる時は殆んど物の數にもならぬのである。『阿彌陀經』の中には我々の善を「少善根福德因緣」と說かれてある。又此の意を『和讃』には

恒沙塵數の如來は、　萬行の少善きらひつゝ、
名號不思議の信心を、　ひとしくひとへにすすめしむ。

と言はれてある。又襄陽の石に刻んだ「阿彌陀經」の文には「名號は是れ多功德、多善根、多福德因緣」といふ文字さへ加はつてあると言ふ事である。如斯く我々のする凡夫自力の善は、阿彌陀佛名號の大善大功德に比べる時は、實に小善根福德因緣である。否な殆んど無いと言つた方がよい位なのであります。設へ天下の富を一身に集め、又如何に錦を飾つて親の許に歸つても、夫等の善が親の前で何になるか。之は勿論自分から謙遜して言ふのでも何んでも無い、實際我々の爲す事が此れ位な價値しか無いのである。されば自分の善し惡し位はどうでもよい、唯其如き我々を他迄惠んで下さる如來の御恩を頂かせて貰ふ事が肝心なのであります。『法華經』の中には「鈴蝉辛苦五十餘年」と御說きあらせられてある。佛は長い間我々を呼びづめにして、今氣が附くか々々と久遠劫來待ち受けて下さるのである

今日の言葉で人格と言ふ事も、私は此の親が見えた時に初めて言へると思ひます。若し此の宗敎的意味を離れた今日の所謂人格ならば、畢竟無意義である。設ひ死刑の囚人でも、最後に親の惠みに氣が附いて「あゝ自分は眞に罪の深い者で有つた」と、眞實の親の見えた時には、其人格は生きるのである。生きるは親を見出して、眞の親の子として頂くからであります。之に反して如何に富みや學問を持つて居つても、一生親の御恩を氣附かずに畢つたなら、是程氣の毒な事は無いのである。其人は永く親の家に歸る事の出來ぬ人である。

斯く言ふ時は、何んだかひどく善をこなしたやうで有りますが、之は決してそうぢや無い、親鸞聖人の『信卷』の上には、次のやうなお言葉が有るので有ります。

凡そ大信海を按ずれば、貴賤緇素を簡はず、男女老少を謂

はず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論せず、行に非ず、善に非ず、頓に非ず、漸に非ず、定に非ず、散に非ず、正觀に非ず、邪觀に非ず、有念に非ず、無念に非ず、尋常に非ず、臨終に非ず、多念に非ず、一念に非ず、唯是れ不可思議不可稱不可說の信樂なり、喩へば阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如し、如來誓願の藥は能く智愚の毒を滅する也。

即ち此の廣大な如來の御親心は、貴賤緇素に係はるのでも無ければ、男女老少に係はるのでも無い。亦惡人だからとて、助からぬのでなく、善人だからとて必しも助かるには限らぬのである。此方の修行の多少によつて區別が有るでも無ければ、自分のする行や善が間に合ふのでも無い。又頓に御惠みに氣が附いたから善いと言ふ譯でも無ければ、漸々に氣が附いたから惡いといふ譯でも無い。又冥想靜觀してゆく定善でも無ければ、意志力を以て實行する散善でも無い。觀察の正邪に係はるでも無ければ、念の有無によるのでも無い。又臨終に喜ばんならんのでも無いが、夫かといつて必しも平生の時に頂くと限つたものでも無い。又多念でも無いが、一念でも無い。唯是れ不可思議不可稱不可說——凡夫の思量を以ては何とも言ふ事の出來ぬ信樂の味はひである。譬へば彼の阿伽陀藥が一切の毒を消滅させる如く、此の如來廣大の御親心の藥は能く凡夫智愚の毒を滅して下さるのである。我々は常に智愚の考を振り立てゝ此世に汲々と爲て居るのであるが、智といふも愚といふも畢竟我々を迷はせる根本の毒である。即ち我々が惡人だから助けて貰へぬと思ふのも、此の智愚の計らひ心から來た間違ひなれば、善い事をするから助かると思ふのも、矢張り之から來た恐ろしき邪見である。其處で今本章には「善人なればとておのれがなすところの善をもて、かの阿彌陀佛の報土へむまるゝこと、かなふべからず、惡人また申すにやおよぶ、己が惡業のちから、三惡四趣の生をひくよりほか、豈報土の生因たらんや云云」と明了に此間の筋道を指示して下されたのであります。

茲て一寸注意せんならぬのは、「惡人また申すにやおよぶ、己が惡業の力……生因たらんや」といふお言葉である。此の一句は隨分思ひ切つたお言葉であつて、而も氣の附かぬ人が多いのであります。一體他力の法門を聞き慣れた人の間には、惡人が往生するといふ事を當り前の事のやうに聞き流す惡癖がある。私が旅行してる間にも斯ふいふ土地が少くないのであります。併し惡人が當り前で極樂に行ける筈は無い、當り前なら地獄におつべき筈なのである。否な放つて置けば地獄より外に行き方の無い我々の身上なのである。例へば囚人にしても、親の家へは何時でも歸へれると思ふて居る間は、まだ本當に親の惠みの有り難い事、自己の罪の深い事が解つて居無いのである。此間も或る死刑囚の一人に「死んでも極樂へ往生させて下さる」と、言ひ聞かせますと、「いや私のやうな惡人では駄目です」と、何んでも無い事のやうに言つて居る。其處で私が「お前は極樂へ生れさせて頂く事を、そんな何んでも無い事のやうに言つて居るが、お前は此の儘ぢや地獄へ落ちるのぢやぞ、地獄しか行く處は無いのぢやぞ」と言つたら、大層驚いた事が有りました。斯くの如く、死んで極樂

に生れさせて貰ふ事を一向感じ無い人がある。夫は自分が此の儘ぢや地獄へおちる事、地獄の外には行き場の無い者である事を知らぬから、極樂に助けて下さると聞いても喜ぶ事を知らぬのであります。

猶ほも一つ逆上ると、親鸞聖人の時代に、既に此の間違ひが有つたものと見えます。『歎異鈔』には宣はく、

そのかみ邪見におちたるひとありて、惡をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみて惡をつくりて、往生の業とすべきよしをいひて、やう〳〵にあしさまなることのきこえさふらひしとき、御消息に、くすりあればとて毒をこのむべからずとこそ、あそばされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。云云。

此の文て見れば、も一歩極端に、惡い事をした者程助かるといふ大邪見が、聖人の當時既に出來て居つた事は確かてある。

併しながら茲て最も氣を附けて頂かねばならぬのは、今申す如く惡人が當り前で助かる筈は無いが、佛陀の親は其惡人程彌々益々之を哀れんで下さる事である。而して其の助かるべき筈のなき我々が、此の度は此の廣大なる如來の御念力の御力で、助けて頂く事てある。毎々申すが如く、佛陀の本願は、もと〳〵我々が何一つ出來ぬ地獄一定の惡凡夫なるを哀みて、お立て下された願てある。我々が惡業の外何一つ出來ぬ淺間しき惡凡夫なる事は初めより御承知の上の事なのてある。其の淺間しき我々を、唯我が願力一つで助けると言つて下さるのてある。夫で有るから、我々が善からうが、惡るからうが、夫に係はる事ぢや無い。唯斯くの如き何とも言はうやうなき廣大なる御哀みと頂いて、其儘喜ばせて貰ふ外は無いのてある。其處て次には、

しかれば善業も要にたゝす。惡業もまたさまたげとならず。善人の往生するも、彌陀如來の別願、超世の大慈大悲にあらずはかなひがたし。

善人の往生するも、自分の善の力て無い。自分が善い事出來ると思うてる中は、まだ本願の親心が少しも頂けて居無いのてある。けれども其の如き者も大悲の親は決してお見捨て下さらぬ。最後に終に親の眞實に氣が附いて、大慈大悲のお力に助はれるのてある。

惡人の往生、またかけてもおもひよるべき報佛報土にあらされども、佛智の不思議なる奇特をあらはさんがためなれば、五劫があひだ、是れを思惟し、永劫があひだ、これを行じて——

即ち今申す如く、善因善果惡因惡果の道理て我々如き惡人が、思ひも及べる報佛報土にはあらねども、佛智の不思議を現はさんが爲めに、——覺如上人(此の『執持鈔』は親鸞聖人の仰せを、覺如上人が集められたものてある。)は佛智の不思議といふ事を、いつも能く仰せられる。誓願不思議名號不思議等色々ある中て、殊に此の佛智不思議を最も能く言はれた方てある。——五劫永劫の間苦勞して下されて、

かゝるあさましきものが、六趣四生よりほかにすみかもなく、うかむべき期なきがために、とりわきむねと、おこされたれば、惡業に卑下すべからず、とすゝめたまふむねなり。

我々惡人が六趣四生の外に捜み家なく、未來永劫浮ぶ瀬無き事を哀れみまし〳〵て、主として、我々惡人の爲めに起し給へる本願てあれば、惡人だからとて卑下するには當らぬ。自分は罪が深いから、お助には預れまいなどゝ、自分から氣を廻はして卑下するのはまだ本願の御意が充分に頂けぬからてある。

されぱをのれをわすれて、あふぎて佛智に歸するなことなくんば、おのれがもつところの惡業、なんぞ淨土の正因たらんや。すみやかにかの十惡五逆四重謗法の惡因にひかれて、三途八難にこそしづむべけれ。なにの要にかたゝんゝされば善も惡も打忘れて、仰いて此の廣大の仰せのまに〳〵從ふ外には、我々凡夫が往生の道は一つも無い。若し然らずば自分の惡業に牽かれ、見す〳〵三途八難に落ちて行くばかりてある。

しかれば善も極樂にむまるゝたねにならざれば、往生の爲めにはその要なし。惡もまたさきのごとし。しかればたゞ機生得の善惡なり。

偖て斯く頂いて見ると、善も往生の爲めに必要てなく、惡も更に恐るゝ所が無い。されば善惡は畢竟の機の生得てある。即ち我々の生れつきの性質、以て生れた業報てある。世間て能く人格の善惡などいふのは、即ち此の機の生得を言つて居るのてあります。機の生得には、或は非常に善い人もあれば、中には非常に氣の毒な人も有る。が之れは宿世の業報て有れば何とも仕方がない。さりながら如來の本願は決して此の機の善惡に係はつて下されぬ。善人ても惡人ても先づ早く氣の附いた者から先きに救つて下さるのてある。だから誰ても自分の善惡を氣に懸けず、直くさま如來本願の親心に目を着けさせて貰ふのてある。そうして今迄久しく知ら無かつたが、成程斯の如き廣大の御哀れみに預つて居たのかと、其儘心に頂いて、善人は其の善を懺悔し、惡人は其の惡を懺悔する時は、皆諸共に攝取光中の人として下さるのてある。

かの土ののぞみ、他力に歸せずば、おもひたへたり。これによりて善惡凡夫のむまるゝは、大願業力ぞと釋したまふなり。

今申すが如くて、機の生得は前生の業力のいたす所てある。世間の業力ても既に是丈けの力がある、處が今阿彌陀如來の本願力は、此の宿世の業力を飛越えて善惡の如何に係はらず、信の一念に皆な攝取して下さるのてある。實に如來の本願は、大願業力とも何とも喩へようのなき廣大な御力てあります。

増上緣とせざるはなしといふは、彌陀の御ちかひのすぐれたまへるに、まされるものなしとなり。

斯の如く彌陀の本願は業力以上の大願業力てある。絶對の力てある。もう此上の力は天地間に有る事無いのてある。而して我々凡夫は此を外にして助る道は決して無い。皆な此の絶對力を増生緣として、彌々今回娑婆永劫の苦を離れ、常樂涅槃の妙境に到らせて貰ふのてあります。猶ほ如何程ても話し度く思ひますが、餘り長くなる故第四章に移ります。

(已下次號)

告白

愛兒の夭折と大悲の善巧

立石仙六

私は生れは福岡縣宗像郡赤間町でありまして、福岡師範學校で師範の教科を修めまして五年間縣内で小學教育に從事してゐました。明治三十七年四月から東京高等師範學校に奉職致しまして、附屬小學校の訓導として今日まで足かけ五年間多數の子供の世話をしてゐます。今日まで私の生活の經驗を申しますと、今年で三十三歳になりますが、誠に平凡な人生の行路を辿りまして、何等の人生の苦痛といふものを味つたことはありません。元より、無常の迅速なる逆境苦痛の何物たるかを全く知らないのであります。然るに、かゝる仕合な生活をしてゐるから、人に對し冷淡な事をしたり、我身勝手な事をしてはならぬと、常に家内などにも申聞かせてゐたのでございます。私の家は、兩親と私の兄弟が四人ゐます。私の子供に本年六才になる男子と、二才になる女の子とがゐました。私達、兄弟四人のものは それぞれ居處を異にして、何分の職業に、從事してゐます。私は家内と子供二人と合せて、四人で、東京に家庭を作つてゐるのであります。兩親丈けは、淋しく鄉里に、日を送つてゐます。私の平素念頭を離れないで遺憾に思つて、ゐますのは、老いたる兩親を三百里外の鄉里に殘して、朝夕起居を共にし賑やかに暮す事の出來ない一事であります。然るに、平素は度々手紙を往復致しまして、互にその健康を祈つてゐました。その中にも、二人の孫に對する祖父母の感情の濃やかなる事に至つては、何とも申す事の出來ぬほどであります。常に往復致しまする手紙の中心となつてゐるものは、二人の孫の身の上であります。取りわけ六才になる長男に對しては、祖父母がかつて手しほにかけて、養育した事がありますので、無上の愛をそゝいでゐたのであります。

處が本年は來る七月の上旬から、暑中休暇になりますから、久し振りに、老父母の安否を伺ひ、兩人の孫の成長の有樣を見せて、十分に老人の心を慰籍する積りで、明け暮れ歸省の事計りの話で、家庭は待ち切つてゐました。國にゐます老父母も、一日千秋の思ひをして、私共の歸省を待ち焦れてゐるのであります。我子の事を申すのは、耻かしい樣でありますが、長男は身體極めて頑丈で、今年まで醫師を煩はしたことはない位であります。精神の發達も人並に劣らぬ樣に見えてゐました。我々の子供としては、何不足ない樣に思つて非常に末頼もしう思つてゐました。處が五月十四日の晝頃から、俄に發病致しました。初めはさほどの事でありませず、又醫者も極めて輕う申してゐました。それ故さほど心にもかけず看病してゐましたが、十六日になつて少しく顎下が膨れ出しまして發熱致しましたが、食事も出來るし、別に苦しむ樣子もありませんし、そしてその日は母と種々の話など致した位でありました。然し子供の事でありますから、頭部を冷や

すやら、通じの工合に注意するやら、厚く手當を致してゐましたが、十七日の朝になりまして、俄に重體となりました。それで非常に狼てゝ、醫師を迎へ種々手當を加へましたけれど、午後になるに從つて、容體は益々重くなり、種々の手當も餘り功果は見えませんでした。然し此間に苦悶する樣な事は少しもありませんで、唯眠つて居る樣でございました。處が午後十時頃、現の樣に次の事を申しました。「お父さんお母さん御心配をなさんな」と、此事が子供の平素の言葉に比べて有り得ない事で、私は唯不思議な事をいふものぢやと、おもつてゐたのでありました。元より、私共夫婦は平素かほどまで丈夫な體格でありますから。此時まで落命しようなどゝは、更に思はなかつたのであります。兎や角する間に、十七日は過き去つて、十八日の零時半頃と思ふ頃、俄然、痙攣を起して目をみはりました。此時初めて事の斷末に臨めるを認めた私共夫婦は水を得へ、氣附藥を與へ、或は叫び、或は呼び醫師よ藥と手を盡しましたが、遂に彼は歸らぬ旅に立ち出でました。此刹那の私共の愁嘆は斷腸と申さうか、悲痛と申さうか、實に自失して涙を流すの瀨戸を過ぎて、全く夢の樣であゝ萬事休すと悲嗚しました。

「世の中に愛兒に分れるより、つらさものはない」といふ事は、兼々聞いてゐましたが、此實驗に逢つて始めて、親子の情誼の眞趣を味ひました。翌日になり彼が生前に關係のあつた人々の同情の吊詞に遇ふ毎に、唯熱涙にむせぶのみで、一言の言葉を發する事も出來なかつたのでありました。私共夫婦は眞に血涙を流しました。起つても、ゐても流涕の乾くを知らなかつたのであります。爰に始めて、人生悲痛の何物たるを眞に了解致しました。多數の親戚、知友の篤き同情に由つて葬式を、本鄉駒込高林寺に營みました。彼が靈に向て燒香をなした時の私の胸中は口之を述べる事が出來ません。葬式をしまつて、親戚數名と共に、日暮里の火葬場に遺骸を送りし途上、目に映ずる凡べての風物、凡べての人事、一として悲しみの種子ならぬはない。火葬場で人夫に渡したる後彼等の棺を取扱ふ樣、恰も驛夫の手荷物を取扱ふそれの如く、一滴の涙なき振舞ひ、心にくしとも、つらかりしとも申されませぬ。棺を釜に收め錠を下し、符印を捺して悄然と歸路に就きました時は、夕陽已に西山に沒し、塒に急ぐ鳥の聲、實に人生の無常、はかなきを告ぐるか如く、悲痛腸にしみ渡る樣でありました。宅に歸れば、常ならば「お父さん」といつて眞先に私を迎へくれるものは、彼の兒であつた。今日門を入れば、唯私を迎ふるものは、香のかほりのみでありました。その夜は只彼が生前の事共を操り返す計りで、遂に眠る事が出來ません。そして翌朝愚弟と共に遺骨を收むる爲めに、再び火葬場に參りました。人夫の手によつて、釜の扉を開けば、前日の棺は全く形を失ひ、只殘れるものは、彼が常に愛玩して爲た、繪草紙の灰となれるものと遺骨のみでありました。遺骨を瓶に收め白木の箱にしまつて、私の膝の上に捧げて車に乘つて、こゝを去りました。骨て車上彼を我が膝の上にして、共に嬉しく樂しく語りしものを、今は白骨と化して、空しく我膝にあるかと思へば、己は全く死地を、辿るの感が致しました。

それから、彼の遺骨を床の間に安置し、家内親戚と共に禮拜致してゐました。種々の追想は中々に、我心を苦めますから、種々の理屈で諦をつけようと考へました。けれども何としても痛惜の情は抑へ難く、なかなかに諦らめる事は出來ませんでした。然るに我は只徒に然に沈むのみては、彼の靈に對して濟まぬと思ひ、且つ私は此度の辛き、實驗に由つて彼の肉體は骨となり煙と化し灰となりて形をかへ此宇宙の間に存在してゐる。然るに彼が活潑にして、向上すべき精神力が肉體の變化と共に消え失せるといふ事は、どうしても信ずる事が出來ない。必ずや彼の靈は何處にか存在してゐなければならぬといふ事を自ら信じたのであります。然らばその靈魂は果して何れの處に宿つて居るかといふ事を考へねばならぬ。處が私は只自分一己の判定で、彼が靈は他に飛んでいつたのではない。必ず吾々夫婦の精神にかへり來つたのである。則ち彼は私共に幾多の教訓を遺してくれた。親として子供の病氣に對する手當の注意として、先(一)醫師を十分に選擇する事。(二)子供は容體が更にわからぬから親が精密な注意を加へ、その容體を探る事。(三)子供の病氣は、その經過甚だ迅速で忽ち重體に陷る事等、及び他人に對しての私の是までの同情心といふものは、眞の心の奥底から出てゐなかつたといふ事を、或は多くの人々の子供に對する私の同情心などの足らなかつたといふ事を、自ら悟り、又親戚友人の私に注いて下つた同情の眞の有りがたさなども、しみ〴〵教へてくれました。それて、これ等の教訓を遺す爲めに、愛兒は犧牲となつてくれたのである。夫故に決して子の教へを無にしては、彼の靈に對して濟まぬといふ樣な考を起して、自ら勵ましてゐました。併し私の最も不足に思ひ、最も遺憾に思つて、實に恨み骨髓に徹してゐるのは、醫師の注意の足りなかつた事、及びその親切の度の薄かつた事であります。その爲めその後醫師の門前を通る事が非常に苦痛であつた。それ故常にその門前を過ぎる事を避けて、迂路を取つてゐた位であります。

彼が生前に愛玩してゐたおもちや、彼の好んで攀りし庭の梅の木。見るもの一として、涙の種子ならぬはない。日を經るに從つて、家庭は次第に淋しさを增し、家内は彼が此休暇に歸省の着物として、新調した衣服を出しては涙に暮れ、尙遠く鄕里にわびしく暮せる老父母の落膽失望の事に想ひ至れば、實に我身の悲しみよりも、更に幾層倍なるものがあらう。特に平素病身の老母は、いよ〴〵身體の健康を害す事であらうと思へば、悲しみの上に苦痛を累ね、我身の腸はちぎれるよーてありました。然るに、二人共斯うして悲嘆に暮れてゐては健康を傷ひ、此上に老父母の苦痛を重ねる樣では實に申譯がないと思つて、氣を變へ運動の爲にもと、生れて此方一度も寺參りをした事のない私が、俄に家内を連れて、淺草の觀音樣から本願寺へと參りました。然るに別に苦痛てはありませんが、慰安の足しになる樣でもなく、只ぼんやりとかへりました。その歸りに不圖思ひ附いて、何でも佛教に關係ある書物を讀んだらよくはないかと、本鄕四丁目の本屋て死生觀と禪學講話との二書を購つて、直に之を繙きました。處が愛兒をなくして、慰安になる意味の部分は、更に認める事が出

來ませんてしたから、格別安心の手段にもなりませんてした。その翌日神田お茶の水光融館ては乘ねて專ら佛書を販賣せる事を記憶してゐたから、何ぞ慰安の方便となるものはないかと、おもつていつて見れば、店頭に近角先生の懺悔錄と多田鼎氏の大聖釋尊といふ小冊子が見附かりましたから、別に深い意味もなかつたのてすが、二つを求めて歸つて、直に一讀しました。之れとても、直に安心の道を得る力とはなりませんてございました。此間に新聞雜誌、佛書等種々讀いて、見ましたが、何れも氣乘りのせんので、十分その眞意を味ふ事が出來ませんてした。かくして遂に、初七日となりました。此日は家内同道、先の高林寺へ參詣して、彼が靈の爲に讀經を願はんと將に出かけようとする處へ、かねて國元ての友人て此の信仰の方面に深い惠みを認めてゐる、有田喜太郎君が、慰問された。その往復の途すがら、私は愛兒の死に對して、浮びし種々の感想、幷に彼の死に由て教訓を受けた顚末を話しました。處が同氏は非常に不思議な面持ちて「君は全体これまて、宗教に就いて、何ぞ研究した事があるか。君が自己の判定だといつてきめてゐる感想は不思議にも、佛の有りがたい慈悲を仰いでゐるのてある。誠に因緣の熟したのてあるといはふか、佛恩の弘大なるといはふか、誠に不思議に堪へぬ次第てある」と、それから樣々佛陀の惠の弘大な有りがたい、信仰上の話に入つて、有田君曰く「君は長男を唯己の愛兒てあると一途に思ひ込んでゐるから、非常に痛惜に堪へんのてあるが、一面は君の愛兒の樣てあつて、實は佛の使としてあらはれたのである。それ故に徒に悲しむ事をやめて、佛恩の高大なる處に向つて深く感謝しなければならぬ」夫れより佛典の種々の有難き御教の言葉を引き、殊に善行方便、攝取不捨の二句に就いて、最も丁寧、親切に說き聞かせられた。私は前申しました通り、生れて今日まて佛教の如何なるものてあるか、又如何なる有難き教が含まれてあるか、更に知らなかつたのてあります。然るに彼が死後幾多の友人知己の深厚なる同情の涙、慰籍の言葉等、只一時の慰めとなるのみてありましたが、此有田君の信仰上の話は一種異樣の感じを私の心の底に響かせられ、何とも申されぬ精神上の變化を起し、全然死地にさ迷つてゐた私の心に、幾萬の味方を與へられた感じを懷きました。傍に聞いて居ます、家内も同時に非常な力を得、誠に有難いお話を伺つたといつて、共に喜びました。その夕方からは沈みに沈みし精神界何となう打くつろぎ、今まて晦渥に包まれし天地が、一時に暗を破つて光明を放ちし心地が致しました。その一夕は有難き、佛恩の話て語り明かしました。翌日は初めて快く床を出て、朝日の影も常に異りて忝けなく嬉しう拜しました。所謂心機一轉とは、かゝる精神狀態を申すのてありませうか。自分ながらも、不思議に堪へませぬ。翌日は有田氏同道築地の本願寺に參つて說教も有難く拜聽しました。私は生れて、初めて說教を聽いたのてあります。歸宅後、再び懺悔錄を翻きました。この度は前と、かはつて、一言一句、私の心の底を衝かれる樣てありまして、特に近角先生の信仰の經過と教科書事件の爲めに入監した人が信仰の光を認められた一條を讀むに至つては、實に無限の感

に打たれ、私は初めて、佛陀の慈悲に包擁せられたる有難さを感じ、實に愛兒は我が子であつて、而も我子でなかつたのか。彼は全く、如來の使てあつたか。如來は我愛兒を通して、我等夫婦に人の道を敎へ給ふたのであるか。あゝ我は斯る高大な惠を受けながら、今日まで氣附かなかつたのは、誠に耻しい次第であると思ひました。顧みれば、自分は、今迄罪を犯した事はない、人に冷淡なる、行爲をなした事もないと思つてゐた。然るに熟々〳〵考へて見れば、私の今迄の凡ての行爲は、全く僞であつた。眞に心の奥底から迸り出たものは、ほんの一つもない、親に對する報恩も、人に對する同情心も、職務に對する忠實心も、全くこれ皆僞であつた。實に私は斯くも腑甲斐ない身であつたかと思へば、只管慚愧の念に堪へませぬ。これ迄、罪惡を犯した事はない、冷酷な事を爲した覺はないと思つてゐたのは、卑しき凡夫の見地からきめてゐたからである。佛陀の高大な大慈大悲の靈光から見給はば、何一つとして、人間らしい行をした事がありませう。ここに氣を附けて頂いた私は、將來、如何にして、親に盡し如何にして人に接し、如何にして職務の爲めに盡したならば、この有難い佛恩に報ゆる事が出來るであらうか、只管、恐惶に堪へないのであります。かゝる慈光に浴しつゝ次の日曜の求道學舍の講話の日を待遠く思つてゐまして、この日初めてこゝえ參りまして、近角先生の御講義を拜聽しました。由來佛典の敎に接した事のない私の耳には、解し難い節々が多々ございましたけれど、先生の熱誠なる御講話の御精神と、處々意味の通するお言葉を誠に有難く感じました　而もその日は、恰も武藤代議士の信仰の告白を伺ふ事の出來る仕合な機會を得ました。同氏の熱烈なる獲信の御實驗談は、一々私の肺腑を衝かれる樣でありました。特に「憎い々々と思つてゐた反對黨に對し、獲信の後は非常に有難く感じて、寧ろ感謝しなければならぬ」と申された一言と、「私か醫師に對せし、惡感情の融解とか」全く符節を合するが如き、感が致しまして、思はず歡喜の涙が下りました。人々信仰の光を認められる道行は、違ふけれども、究極の佛恩に對する感謝の念は、只一つであるといふ事を、感じました。それから私の精神界も日日に爽快になり、彼の死後、二週間丈學校を休んで、その次の週の初めからは、出勤する事になりました。實は彼の死彼一週内の狀態では、何時になつたら、以前の樣に職務を執る事が、出來るであらうかと、心配してゐましたのか、非常に勇んで、職務に就くことを得る樣になつたのも、全く有難き佛の御惠みの餘瀝であると、只もう嬉しくて言葉もないのであります。

次に私は悅びの餘り、その後の精神狀態の變化した實際を、少し述べて見ようと思ひます。私は多年小學敎育に從事してゐますが、最も重要なる學科として、力をこめて授けねばならぬ修身の敎授が、如何にも拙くて、他の學科の敎授に比べて、何故にかくも、己の修身敎授は、効果のないかと、自分ながらも、度々力なく思つた事がありました。處がこの靈光を認めて以來、修身の敎授をなすに當つて、何となう一種の力を得た樣な感じが致します。特に親子の情誼を說く一段などは　從來は全く皮相の理屈ばかりをこねて、その奥底に

一種いふべからざる情誼の存することを說き得ざりし事に、氣がつきました。之に由つても効果のなかりしことは固より理の當然であると思ひますして、只管冷汗を催す次第であります。又修身上の實例に、擧げられたる人物を見るに、唯その事實としてあらはれたる事柄の表面のみ、見てゐましたが、近頃は如何しても、それ等の人のかゝる感ずべき、敬すべき事業をなした心の底には、如何なる力が横はれるかを確めた上て、これが敎授にかゝらねば、安心が出來ぬ樣な感が致ます。例へば、二宮尊德翁の至孝、至誠、實業の爲めに盡されたる如き、又リンコルンの熱烈なる同情心の如き。楠公の至誠以て君國に盡されたる如き。又は河野通有が、挺身十萬の元軍の肝を寒からしめしが如き、皆心の奥底に、一種の動かすべからざる力。即信念がなくして、如何にして、かゝる人間以上の仕事が出來ようかと思へば、此等の人に對する畏敬の念は、前日に幾倍したか計り知られません。特に元寇の大事變の時、龜山上皇が「身を以て國難に代らん」と、伊勢大廟に祈り給ひし大御心の底に、國家と國民とを、思召し給ふ、御一念の外なかりしを思へば、その有難さ、その辱なさ熱涙を以て謝するの外ないのであります。次に私は多數の子供を敎育するに當つて、己の訓戒に背き、又は敎授の事項を了解するに、鈍き兒童に接する度毎に、從前は度々大喝、之を叱して導かんとした事か度々ありました。然るに、今からこれを考へますれば、何故に我は、かゝる腑甲斐ない、淺ましき心を以てゐたのであらうか。小學校の兒童は身體に於ても、知力に於いても、誠に憐れむべき眞の子供である。これを導くに、勵聲叱咤以て、務を盡さんとせし企の如何にも、子供らしく如何に慈悲心のなかりしことよ、實に子供が出來ぬ子供がいけぬとて叱する時は、己れ亦、子供と同等の位置に自ら下りし時である。何ぞこの三十の髯面下げて、可憐の兒童と對等の位置に立ち、而も己は敎師ぞ先生ぞと空威張せしことの耻しさよ、冷き汗は脊を濕ぼすのみであります。佛陀の高大なる慈悲の眼から見給ひしならば、如何に氣の毒に思し召されしならむ。

私は最も感謝しなければならぬといふのは、私如き腑甲斐ないものに、敎育者たる最も貴い、誠に有難い職務を授けられた事である。これまて敎育は神聖である。いや天職であるなどゝ、唱へて自ら力んてゐましたか、さて靜に心の奥底を叩いて見れば、實は卑しい分子が潛んてゐたのであります。全く心にもない、瘠我慢をしてゐたのであります。凡夫の悲しさには、やはり相對的なる、人生を目あてにして、此貴い敎育者の末班を汚してゐたのであります。然るに有難き、絕對の佛陀を拜する事の出來ました今日になりましては、此尊き職務をいや成功だとか、いや名譽だとかいふ樣な、相對的の考てはとても、勿體なくて務める事が出來ませんが、只此辱ない職務を授つた身には、己の知能と體力のあらん限り、奮勵、努力、致しまして、道の爲めに盡すより、外に何物もないのであります。最後に申上げて置きたいのは、敎育の御勅語に對する感じであります。これまて御勅語は、常に有難く服膺致し、御趣旨のある所を、兒童の頭に打込むことのみ心かけてゐましたが、此信仰の光を、認めました今日ては、

御勅語の一言一句、只辱い有難いといふより、外に何等の言葉は出ないのであります。私は此私の感じを出來る丈強く、生徒の心の奥底に感せしめようと、力めるより外ないのであります。私はこの度、國元へ歸省を致しまして、父母に最大の土産として、孫の顔を見せる事は出來ませんが、併し此有難い信仰の惠みを持ちかへりまして、淋しく暮してゐます、老父母に、此惠みを分ち、老父母をして有難い、如來の慈光を拜ませるのか、最大の土産だと思つて、近々に國元へ向つて出發す積りでありまする。

亡兒の四十九日の命日に當り香を薫き稱名を唱へつつ

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛

執持鈔第一章

本願寺聖人仰云

來迎は諸行往生にあり、自力の行なるかゆへに臨終まつこと來迎たのむことは、諸行往生のひとにいふべし。眞實信心の行人は、攝取不捨のゆへに、正定聚に住す。正定聚に住するかゆへに、かならず滅度にいたる。かるかゆへに臨終まつことなし、來迎たのむこととなし。これすなはち、第十八願のこゝろなり。臨終をまち來迎をたのむことは、諸行往生をちかひします第十九の願のこゝろなり。

雜録

故中村候補生のキャンデ
―寺院參拜記

《福岡日々新聞より轉載す》

軍艦松嶋巡厄殉死少尉補候生中村吾一氏は本縣出身にして今回の遠洋航海中屢々紀行を本紙に寄せて艦隊の消息を讀者に報じたりし、氏は拳公の念厚く其觀察常に頗る趣味深かりしがこの有爲なる青年今や亡し、惜むべき事ならずや、左に掲ぐるは氏が今回航海中錫蘭嶋の見聞にして去月廿一日羅尼拉より郵送し昨日本社に着せるものなり、これ氏が本紙讀者への最後の通信にして又或は其の絶筆ならんか、前書の一節に『又々亂筆ながら通信申候、縣下の少年が拙文を見て聊かなりとも海事を知る事が出來れば非常に仕合せな事と存候』云々とあり、以て氏が生前に於ける床しき心掛けを知るべし

遠洋航海私記

軍艦松島乘組　中村吾一

横須賀を立つてから香港、西貢、新嘉坡、ペナン、プロウエー嶋から、椰子の實のる錫蘭嶋までやつて來ました、初航海の事で隨分つらひ時もあるけれど大概は愉快な方が多くあります、

▲三月十七日の朝　椰子の實のる錫蘭島の古倫母港に着きました、大木を抉つつて造つた奇態な小舟に乘つた印度の商人が澤山押寄せて來て忽ち甲板の上は市場になつてしまいま

した、彼等の賣るものは、寶石、金の指環、念珠、黑檀の細工、奇獸の毛など種々であります、初めは大概十圓とか十五圓とか云ふ奴を三十錢か二十五錢にまけてしまいますが、中に正直な日本人は二十五錢の贋物を三圓も四圓も出して買つて落膽して居るものもありました、商人は『吾々釋迦佛陀、君釋迦佛陀、（嘘は申しません）』と云つて僕等の金を捲き上ました、

▲同二十日の朝　六時半我々十六人の候補生は古倫母停車場から汽車に乘つて七十二哩も奥の山中にある靈地キャンデーに遊びに行きました、此處は釋迦の齒を納めてあるので全世界の佛教徒が非常に有難がつて居る處であります、又汽車の上からの眺めが甚だ雄大で千尋の谷を眼下に見下す樣な嶮岨な處があります、キャンデーには奇麗な湖水もあれば海拔千七百尺の山中だけに景色が優れて氣候が涼しいから澤山の外國人が遊びに參る處であります、私は熱帶地方の變つた景色を眺めながら午前十一時半キャンデー停車場で下りて鼻の向いた方に歩いて行きますと、後から旅館の小僧が群がつて來ます、實に五月蠅くて堪らなくなつて閉口して居る處に洋服を着た十五六歳の學校生徒が通りかゝりましたから『寺院はどちらの方に行きますか』と問ひましたら、親切にも『學校の始まるには未だ間もあれば私が案内して上げる』と云つて寺院から公園まで叮嚀に案内してくれました、大分腹がすいた故『第一等のホテルに連れて行つてくれ』と申しますと、湖水の邊に在る女王旅館に案内されました、遠慮する其學童を無理に引張つて一所に晝飯を食ました、ホテルは實に大きなもので食堂の中には三々五々金持の西洋人が、美味さうにやらかして居ました、が私共は慣れぬ事だから無作法で耻しい樣な氣持ちがしました、けれど案内した學童は當地でも良家の小供と見へなか〳〵行儀能く食て居ました、學童は學校が一時半に始まるからと手を握つて別れましたが『モウ會へないかも知れぬ』と云つて又た後戻つてとう〳〵停車場まで見送つて呉れましたが、互ひに名刺の交換をして後の手紙の出しやりを約束して別かれました、それから當地のツリニチー中學校の生徒が十七八人で一臺の二等客車を借り切つて乘つて居ましたが私を手招しますから行きますと、皆な私を取り卷いて日本人も印度人も兄弟だと云つて大喜び、勿論當地は英國の領だけに中學生でも英語は私共よりヅツトうまいのですから、彼等の話は大概分ります、彼等一行はクリケットの試合を古倫母の四校とやりに行くと云つて居りました、未だ十五六歳から二十歳位ですけれど、隨分奢つたもので、帽子でも服でも靴でもハイカラ式で東京の慶應義塾のベースボールの選手でも彼等の贅澤には及びますまい、僕も幸福なことには日本に產れたばかりで彼等は非常に尊敬してくれました、彼等は自分の國を亡つてしまつて、外人の壓制を受けて居る事を非常に殘念がつて、何うかして日本のやうな獨立國になりたいと憤慨して居ましたが、私は彼等の心中を推察すると氣の毒でなりません、其れにつけても日本の小供は深く先祖の御恩を思い奮勵しないと必ず天罰を蒙る事と存じます、彼等は何を云つても日本の事と云へば耳を澄まして聽きます、後には日本の歌を歌つて聞かせと云ひ出しました、之

れには閉口しました『君の方で歌つたら僕も歌つてやらう』と申しますと、彼等は聲を合せ手を打つて面白い歌を五つ六つ聞かせた後ち『サー此れから日本の歌だ』と云つて責めつけられ『では日本の國歌をやろー』と云ふや否や、彼等は帽子を取り、姿勢を正しました、僕は拙い聲を絞り上げて『君が代』を歌いました、彼等はサンドウッチやら、西洋菓子やら、椰子の實、芭蕉の實、密柑などをドッサリ買込んで『サーやり玉へ〳〵』と私の前後左右から持つて來ました、私は生れてから此の位好遇された事はまだありません、後には私の年を幾歳と問ひますから『當て見よ』と申しますと、十八と云ふものが一番多かつたから、十八だと云ふと彼等は大喜びで年丈けたものは兄だと云つて威張るし、若いものは弟だと云つてなつかしがり、私の帽子を冠つて濟まして歩いて見るものあれば、劍を帶て日本の軍人に成つたと喜ぶものもある、僕の脇下をくすぐる少年もあれば、日本に歸つたら君の寫眞を送つて呉れと頼むもの、自分も中學を卒業したら父に願つて東京の大學校に行く積りだから宜しく頼むなど、眞面目になつて云ふもの、年の大きいものは自分は日本の女を嫁にして日本人になり度いなど面白い事を云つて笑はせるものもあり、其親密な事は丸て十年の友達の樣でありました、彼等は又英彦山の講堂の上から筑豐の平野を眺望する樣な所に汽車が差しかゝると、僕の手を取つて『アレ見よ此の景色のよい事はどうだ、日本にも此んな處があるか』と得意げに自國の美を誇つて居ります、午後六時古倫母停車場に着し彼等一同と握手して別れました、彼等の情ある言葉はどうしても忘れられません

▲同二十二日　午後三時僕に面會人があると當直候補生から知らせがありましたから、誰だと思つて出て見ると思ひも寄らずモウ一生涯會へまいと思つて居た一昨日のツリニチー中學生が皆な來て居ます、僕は實に嬉しくて堪りませんでした、外に三人の候補生と艦上艦内隅なく案内してやりました、彼等の謙遜な事は痛み入る、水兵の前でも帽子を取つて艦長室や、士官室などを見る時は畏る〳〵して日本人の機嫌を損ぜぬ樣にと互に戒め合つて居ました、後ち候補生室に連れて入つて日本の煎餅や、砂糖豆などを御馳走しました處が彼等の喜び一方ならず、我々五十人の候補生は皆彼等に少さい軍艦旗をやつたり、繪葉書をやつたり、寫眞とか、菓子とか澤山やりまして、午後四時半頃愈お別れしましたが、再び會ふことは難しいと思へば女らしい樣ですが名殘が惜まれました、彼等は私の面が見へなくなるまで『日の丸の旗を手に手に振つて居ました』同郷の少年諸君　世の中に國を滅ぼされ他國人の手下になつて居る國の小供程氣の毒で、可愛そうなものはありません、見玉へ、東洋廣しと雖も他國の御厄介にならずに確乎やつて行ける國は、唯日本ばかりではありませんか、亡國の小供と云つても決して馬鹿ばかりではありません、教育を受けた中流以上の人は毎日悲憤慷慨して日本を羨んで居ます、我々は未だ何にもせず親の脛をかじつて居りながら日本に生まれたばかりて、どれ程仕合てあるやら知れません、日本の如き君子國に産れた少年は餘程奮發しなければ我々の爲めに旅順や滿洲で死んで下さつた勇士に對して申譯せん

がありませんぞ（亦道を横切るの日之を認む）

故中村長谷部兩候補生哀悼書簡

一

海軍主計中監　窪田重弐氏

肅啓、陳者尊師愈御健勝奉欣賀候。下て迂生不相變無異罷在候間乍憚御放念被下度、偖本年は何事そ、我海軍に不吉のことのみ多く、遂には松島を沈め、幾百の將卒を一舉にして信の夢の間に夢と消しむ。急報一たひ到り、彼の長谷部中村兩候補生は如何にと思ひきも仇なり、恰も本日新緑の帝都に一壺の灰と成て斂めらるゝことゝ相成候、悲哀の極み御同感に御坐候處、更に貴翰を拜し一厨五臟六腑を捻ち千切らるゝの思ひに沈み候、されと拜讀再三不圖佛陀の光明に接する想あり、乃ち「美事の信仰に入れり」云々の御一言に御坐候。成程軫念之を久ふすれは何も遺憾無之事に御坐候。兩子に對する所感を報せよとの仰、是に於て覺束なくも勇を皷して筆を執り候。

噫哀哉、予か兩子を識りたるは松島の横須賀發航前三日と覺ゆ、いつもの通午後五時半頃鎌倉の停車場に下り、扇谷の蹈切えとかゝれは、二人の少尉候補生途に待つあり、識らされは知りやうもなき平服の予に向て、爾は何某にあらすやの問、然りと答ふれば、尊師の紹介狀を取り出し、乍延引是非一瞥したく訪ねたりとの言に有之候。珍客何を以て酬んや、早速草廬に入り、お互の挨拶そこ〳〵直に法談に入る。長谷部は沈肅、中村子は歡喜、近來得難きの青年と見受候。宗教論と申すべきか、光明論と申すべきか、兎に角佛法の眞髓談に至ては、到底迂生如き淺薄なるものゝ未た及はさる所、寔に感心仕候。予か精神何事かならさらむの論と、事實談には大に興味を有せられ、洋々として盡くるなき有樣に御坐候處、歸艦の時刻迫れり、明日再ひ來らん、然らは是非來られよと遂に本意なき別をなすに至り候。懷へは是そ現世唯一度の會合に御坐候。翌日予は役所に在るや、午後四時頃水交社より電話あり、本日は無據ことあり約を履む能はす、歸朝の日を期すとのことに有之候、噫、懷へは〳〵不思議の緣に御坐候、所謂歸朝の日とは今日のことなりしが。

兩子の批評は到底迂生の試むる能はさる處に御坐候。況や信仰の是否深淺に至ては尚更に御坐候。乍去曩に唯一度會見の際迂生の胸に浮ひたる所感を申さは、中村子の歡喜は餘り歡喜に過くるなきや、歡喜溢れて之を人に語るは或は止むなきと雖、思ふに予は自ら歡喜すれは自ら歡喜し、自ら修め、自ら行ひ、語らすして人に知られ、人を勸化するを得は最上なり、道を蹈んで直に歡喜し、門に入て直に淨土に達したるが如く思ふは、或は甚しき危險にはあらすやと感し候。故に唯一度會見の予は、中村子か信仰の前途に於て或は大峻坂に到るの日なきやと疑ひ候。否らされは子は既に悟道徹底の大慈悲にして、現世の如來かと思ひ候。何々上人何々大師といふのは、子の如きか生ひ立つものかと思ひ候。長谷部子の眞摯は外形上中村子の信仰よりも薄きか如くなれとも、決して否らす、子の如きは中途にして迷ふなきの人と確認仕候。何れに

しても兩子は信仰の門に入りたる得安からさる青年、遂に乍未練殘念のことを致候、青葉暗く杜鵑海に渡り、白波由井ヶ濱を嚙み、草廬の松に蓼々の聲殘り候。南無阿彌陀佛。

明治四十一年五月二十二日夜

二

陸軍中佐　光井　香氏

拜復　中村吾一君事、實に悲痛之極に候。

同氏生前之事を求道に御掲載相成に付、何か申送れとの事承知仕候得共、別に之れと云ふ材料無之候。

同氏とは全く一回の會談を試みしのみ。以前は嘗て姓名さへ知らさる間柄なりき。其一回の會談によりて、十年の交際にも勝るか如き感を覺へしは、佛力と云はんか。

出發後は唯一回單簡なる通信有之候。其手紙も小生へ宛てたるものにあらず、十歳になる拙娘に與へたるもの、文句にお土産をたんと持て歸朝するから、待つておゐて抔有之位なりき。

一回の來宅にて妻下女に至るも、中村さん〳〵と云ふて舊知の感を懷く。天眞流露して一微塵の陰蔽なき處は、差別觀に鍛はれ來りたる凡夫俗人の眞似の出來ぬ處。

直に淡敷境涯と存候。

返す〳〵も痛はしき事に存候。

餘は後の便に可申述候匆々。

五月三十一日

慶嘆

十三　善惡攝取

大躰親鸞聖人の眞宗なるものは、書物の上、文字の上の眞宗でもなく、又法門の眞宗でもない、聖人の心中に如來の眞宗を味はゝれたその妙味が眞宗である。乃て聖人の著書を讀むとも普通の書を讀むつもりて讀むと其味を失ふ、聖人の著書は文字をのみ讀まずに、その文字の上に顯はれたる佛陀眞實の御惠を讀ませて頂かねばならぬ。然るに從來この有り難い書をは、難澁なるもの、乾藻無味なるものゝ如くに思ふものか少くない、しかるゆへんは、鎌倉時代の實際の味から書いた有り難い信仰の書を、秩序的律法的の德川時代に來つて、訓詁的註解的に讀み去つたから、充分にその眞の味が出て來なかつたのである。此書の如き信仰の書は強ちに解釋を要せぬ、たゞ聖人の實驗を味はせて頂くが肝要である。

今日まで講し來つたる『敎行信證』は、親鸞聖人の內心上の味であつて、これか人生の實際にあらはれたるか、二種回向の眞味である、聖人は唯一の南無阿彌陀佛の御惠を以て、曾

て此大なる惠を知らぬところの人生の實際に切り込んで種々に導いて下された、此が聖人の一生である。而してその聖人の信仰の直寫か此『敎行信證』一部である。中に於て敎、行信、證、眞佛土の五卷は絕對他力の信仰を正面から顯はし、化土卷に來つては、隔ての多い、計らいの多い人生に立ち入りて、自己信仰の味を以て種々に批判を下してある。換言すれは聖人の一代に於ける實驗的信仰の人生的經過が、此化土卷に於て殊に著しくあらはれて居る。

抑此『敎行信證』は開卷第一、

竊かに以みれは、難思の弘誓は難波海を度するの大船、無碍の光明は無明の闇を破する惠日なり、

と、先つ佛陀の御惠みの廣大なるを嘆美し、次に

然れは則ち淨邦緣熟して、調達、闍世をして逆害を興せしめ、淨業機彰れて釋迦韋提をして安養を選むしめ玉へり。

と、この人生上に佛の惠みの顯はれ來つたる事實を出してある。この事實は云ふまでもない『觀無量壽經』に於て示されたものである。しかるにこの『觀無量壽經』は、表面に定散九品を說いて、自力の分別を以て種々に計らふものをして、遂に佛智不思議の計なきところに入らしめてある。乃てこの經の眞意を信仰の眼を以て見るときは、提婆阿闍世の如き、全く佛陀の大なる惠を露ほとも知らずして、忘念の催すまゝに妄りにこの人生の事を計らつて自ら纏縛苦悶して居るものを初めとして、其他一切の善を修し功德を積みながら、自力作善に苦しんで居るもの等何れも自力の計を逞ふするものが、終にはそれが緣となりて絕對不可思議の御惠によりて助かるといふことを、人生上の事實に當りて實驗したるが、觀無量壽經』であると云はねばならぬ。次に又『阿彌陀經』は念佛一つを辿つて居るものを、終に絕對の信仰に入らしむることを示して、此絕對他力の道は釋尊か此人間世界に於て說くのみにあらす、廣く十方の世界に通して、諸佛の齊しく說き勸むるところであると示したものである。要を取つて之を云へは。この『觀經』『阿彌陀經』は、共に表面には方便假門を說いてあるか、終局のところは逆惡不善惡邪無信のものも廻り〳〵て終には佛の惠に救はるゝことを示すに外ならぬのである、本來五濁惡時惡邪無信の輩は、この絕對他力の惠によりてのみ救はるべく、絕對の他力救濟はこの濁惡邪見の徒の爲にあらはれたに外ならむのである。よりてその次の文に

は、

斯れ乃ち權化の仁、ひとしく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲正しく逆謗闡提を惠まんと欲す。

と云ふて居られる

この事實は千古萬古其規を一にして居る。近くは法然上人親鸞聖人の事蹟に就て之を見るに、法然上人は我日本國に於て念佛一宗を興隆して、盛に一切善惡のものゝ往生の道を開いて下されたが、晩年に及んで念佛停止の令下り、剩へ上人の門徒第子數輩を死罪流罪に處せられた。親鸞聖人亦其一人である。かく兩聖人を迫害する非常なる出來事によりて、益廣大なる佛の惠が顯れ來つたのである。

抑何故に世人が此の如く法然上人等を惡く思ふたかといふに、法然上人が聖道門を拋ち萬善諸行を捨て、唯念佛の一法のみ當今末法に於ける出離の要道なりと大喝せられたからである、この上人を彈劾したる反對の人達は、皆な顏に角の生へた惡人かといふに、拇尾の明惠上人、笠置の解脫上人の如き高僧方か、首として法然上人の立義を痛く憤慨せられたのである。乃で本來の問題は權實眞假の問題である。法然上人の信仰は、聖道門八萬四千の法門では何れの門を以てしても涅槃には行けぬ、唯念佛一つのみ極果の佛地に至るべき道であるといふのである。南都北嶺の諸寺の釋門、並に世俗の儒者輩に至るまで、當時一般の思想界は、此上人の信仰をは味ふこと能はずして、彼は叨りに僻說を唱へて高尙なる顯密の敎法を斥け、北嶺南都を蔑視するもので、實に正統の佛敎を破滅する惡魔であると憤慨したのである。法然上人の立場は、世の中に眞の惠は南無阿彌陀佛一つであるといふに、他の反對の人々は、自ら心を淸くし行を修めて佛果に行かんとするが立場である。かく異れる立場よりして上人を疑ひ上人に反對し、果ては迫害するまでに至つたのである。その水火の中に立ちて念佛一門を宣說し玉ふ事實は、之を溯れば觀經の上に於て、釋尊が提婆阿闍世の迫害の中に、廣く佛の惠を說き阿彌陀經の上にありては五濁惡邪無信の熾盛なる間に、念佛を說くと其轍を同ふする。彼の法然上人の弟子住蓮房が

『五濁增時多二疑謗一　道俗相見不レ用レ聞、
見レ有二修行一起二嗔毒一、方便破壞競生レ怨』

の文をは、念佛停止の廳前に朗々と高唱して捕へられたは尤のことである。よりて『敎行信證』の跋文には

竊に以みれば聖道の諸敎は行證久しく廢れ、淨土の眞宗

は證道今盛りなり、然るに諸寺の釋門、敎に昏くして眞假の門戸を知らず、洛都の儒林行に迷ふて邪正の道路を辨ふることなし。

と斷言せられた。これは單に筆端を弄したのではない、信仰の熱血の迸つたのである、故に次に其事實を叙して

斯を以て興福寺の學徒、大上天皇（號後鳥羽院諱尊成）今上（號土御門院諱爲仁）聖曆承元丁の卯の歲仲春上旬の候に奏達す。主上臣下法に背き義に違し、忿を成し怨を結ぶ。玆によりて眞宗興隆の大祖源空法師、並に門徒數輩罪科を考へず猥りがはしく死罪に坐す、或は僧の儀を改めて姓名を賜ふて遠流に處す、予は其一なり。

此の如き迫害の中に於て、身は碎くるも唯念佛一つを持つて變することなきが、兩聖人の信仰である。拾遺古德傳に、法然上人配所に趣き給ふ事情を叙する中に、

承元々年三月上旬の頃、聖人すでに配所に趣きましますべきなりければ、月輪の禪定殿下の御沙汰として、法性寺の小御堂にわたし奉り逗留をなしき。三月十六日都を出でたまふ、（中略）すでに進發のとき（中略）卒爾をかへりみず一人の門弟に對して、一向專念の義とのべ玉ふ。御弟子西阿推參して曰く、是の如きの義しかるべからす覺え侍べりと。聖人ののたまはく、汝經釋を見ずやと。西阿申して云く、經釋はしかりといへとも世間の機嫌を存するばかりなりと。聖人またのたまはく、我れたとひ死刑に行はるとも更に變ずべからずと云ひ、其氣色もともに熾盛なり、見たてまつる諸人、淚を流し隨喜せすといふことなし。

といふてある。法然上人の念佛はたゞ口で稱へたのでない、身を以て說いて下された有り難い念佛である。それ程有り難い絕對の大悲を知らずして、自性唯心に沈んで淨土の眞證を貶したり、或は親しく絕對他力の敎示に遇ひ乍ら、矢張り定散の自心に迷ふて元の律法主義に陷つたりするもの、多きは、實に憐むべく又慨くべきことである。

常に云ふ如く、所謂逆惡の凡夫を捨て給はぬ佛陀の惠は、罪の重きによりて助からぬにあらず、善根の多きによりて勝るゝにもあらず。よりて法然上人は

『本願の念佛には助をさゝぬなり、助さす程の念佛は極樂の邊地に生る

と斷せられた。上人は一代の間此の如くに明快に本願の念佛

を說きたるにも拘はらず、上人自身は持戒淸淨にして、圓頓大戒をも捨てずにまし〳〵たゆへに、たゞ外部より見たるものは上人の信仰の眞味を取ること能はざるも止むを得ぬことである。或人か法然上人に尋ねて曰く、「持戒して念佛すると破戒にて念佛すると其功德同じといふは如何」と。上人答へ曰く「持戒破戒といふは戒ありての上の事なり、例へは疊あるところにこそ破れたると破れぬとあるが如し、今の我等は無戒なり、如何でか破と持とを沙汰すべけん、かくの如き無戒の比丘も、此念佛のみにて往生するは本願の約束にてあるなり」と、かくの如く懇々敎へられても 尙世人はそうはいふものゝこの念佛は無戒などで稱へては功德が少からんといふ自心の計らひか止み難い。是に於て親鸞聖人は斷然在家の行儀を以て、妻を持ち子を持ち、此人生の上に於て汚れたる無戒名字の比丘として、身を以て本願の念佛を立證し玉ひたのである。

聖人か當時に於て在家生活を斷行せられたるは實に非常のことである。當時の律法主義の佛法者の目には、如何に異樣に映したであらう。現今ですらも東京杯にありて一般の人の思想からは、眞宗は反佛敎である 破格であると思はれてある。甚しきは邪宗とまでも思はれて居る。今日これ程迄に他力信仰の盛なる時代にすら、此の如し、況や聖人在世の狀態は想像せらるゝことである。さて其ように思ふ所以は何かといふに、其人自身は在家とは殊なりて、立派なるものである、淸きものであると思ふて、絕對不可思議の佛の惠を見ざるからである。親鸞聖人は化身土卷本に於て傳敎大師の末法灯明記を引いて、末世のものゝ持戒の出來ぬ淺間敷い有り樣を委しく示された。其中に曰く、

將來の世に於て法滅盡せんと欲せんとき、當に比丘比丘尼ありて我法の中に於て出家を得たらんもの、己れか手に兎の臂を牽き、而して共に遊行して彼の酒家より酒家に至らん

等とまでいふてある。これは末世は實に此の如き有樣であると示す一面に於ては、聖人が自らひどい懺悔をせられたのである。自分の方に懺悔して居ると共に一方には、末世に於ては眞の比丘無ければ『名字の僧衆をも應に禮敬せんこと、舍利弗、大目連等の如くすべし』と論ぜられたのである。

因に親鸞聖人の和讃を取つて窺ふに、矢張りこの『敎行信證』と同一轍に出てゝある、淨土和讃、高僧和讃の二帖は佛

經と論釋とを本として、正面より佛智不思議を讃歎し、正像末和讃に至つては其名の如く、先づ正像末法の三時に亘つての佛法の興廢について述べ、次にこの時を思はず、機を省みずして出離を求めんとするものは、佛智不思議に入る能はずして疑惑に滯るものなることを述べ、かゝる人の多き中に、我が如きは何の幸ぞ他力不思議の信仰に入るを得たり、これ全く還相大士の聖德法皇の惠によるといふ意より、皇太子奉讃を作り、最後に及んで悲歎述懷の和讃十六首を列ねて、一面からは自己の淺間しきことを歎き、一面からは眞の惠を知らざる外道的佛敎を悲まれた。その述懷の有樣に至つては、自他の區別を見るの暇なく、自己の內心といひ、當時一般佛敎の有樣と云ひ、いかにも淺間敷ことであると悲歎せられた。親鸞聖人當時の佛敎界の有樣は、眞實に佛法を喜ぶものは稀れであつて、自然に色々の祈禱加持等、現世の禍福を左右せんとする如きことを專らとして、外儀は佛法のすがたでありながら、內心の實際は皆外道に走つて居る有樣であつた。この中に立つて親鸞聖人は外面に强ちに賢善精進の相を現すること勿れ、水垢離をとり苦行を修しても、精神潔齋の殊勝如法なる相を現しても、必竟は駄目である、しかず念佛して速に西方に往かんにはと、凜然として法然上人の信仰を傳へられた。もうここに至つは眞假の區別ぐらいでなしに眞僞を勘決して邪僞異執を敎誡せねばならぬことになつて來た。乃で、化土卷末の首に於て、先つ涅槃經の

佛に歸依せんものは、終にまた更其餘の諸天神に歸依せざれ。とある文、及般舟三昧經の

優婆夷此三昧を聞て學はんと現せんものは、自ら佛に歸命し法に歸命し、比丘僧に命せよ、餘道に事ふることを得ざれ、天を拜することを得ざれ、鬼神を祠ることを得ざれ、吉良日を見ることを得ざれ、

といふ文を引き來つて、眞の佛敎は三寶歸命の外なく、其餘は皆外道であると斷じ去るに至つた、見去り見來れは正像末和讃はこれ、全く假名書きの化身土卷である、

要するに親鸞聖人が自ら悲歎せられたる他の半面に於ては唯々佛の惠み一つを喜ばれたのである、此佛の惠み一つを喜べは身を淸めるともいらず。心を靜むることも須ゐずして、而も求めざるに天神地祇は此念佛者を護持養育し、日月星辰も常に照覽擁護を與へる。一家の中も廣き世界も、天の星も地の文も皆佛の惠の外はない、かゝる廣大の御惠を知らずし

て兩聖人を流罪に處するに至つたは、寔に憐むべきことである。常の人ならば罪なくして配所の月を眺めることであるから、如何ばかり寃を訴へ人を怨むのであらうに親鸞、聖人は

大師聖人源空もし流刑に處さられたまはずば、我又配所に趣かんや。もしわれ配所に趣かずんば、何によりてか邊鄙の群類と化せん。是なを師教の恩致なり。(御傳抄)

といふて喜はれた。色々の出來事か益佛智不思議の廣大なることをあらはして下さる方便であると深く信し給ふ聖人にとりては、何れに向ふても敵と云ふはなく、一方の人の疑謗迫害はいよ〳〵佛教の信頼すべきを示す爲であり、我等師弟を遠流に處せしは、遠方邊鄙の地にまで此眞の惠を傳へんが爲である。皆是廣大なる佛陀慈悲の計らひである。今我れ此の如き廣大の惠に入ることを得たるは、偏にこれ佛教の恩致である。たとひ法然上人にすかされまいらせて、地獄に落ちたりとも更に後悔なしと師教を丸呑にして、眞の惠の廣大なることをは喜はれた。よりて『教行信證の跋文にさの流罪の事實を擧けたるに次いて、直に師資相承の因緣を自ら叙して曰く、

然るに愚禿釋の鸞、建仁辛酉の曆、雜行をすてゝ本願に歸す、元久乙丑の歳、恩恕を蒙つて選擇(本願念佛集)を書き、同しき年の初夏仲旬第四日に、選擇本願念佛集の內題の字、並に、南無阿彌陀佛往生之葉念佛爲本と、釋の綽空の字とを、空の眞筆を以て之を書かしめ玉ひき。同日空の眞影申し預りて圖畫し奉つる。同二年閏七月下旬第九日、眞影の銘は眞筆を以て、南無阿彌陀佛と、若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺、彼佛今現在成佛當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生の眞文とを書かしめ玉ふ。

其師資親密の狀態見るべきである、親鸞聖人か二十九歳の春より三十五歳の春まで、法然上人に親炙して聞かれたるは、唯この重願不虛稱念往生の一義である。親鸞聖人『選擇集』を見ること深くして『教行信證』一部全くこの選擇集の要義を述ずるの他なしてある。次に選擇集を嘆して曰く

選擇本願念佛集は、禪定博陸(月輪殿兼實法名圓照)の敎命によりて、選集せしむるところなり。眞宗の簡要、念佛の奧義、こゝに攝在せり。見るもの諭り易し。誠にこれ希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり。

嘆美洵に至れり盡せりである、聖人か選擇集を嘆美し玉ふ言は、移して以て私共か『教行信證』を嘆美する語としてよい。

扨聖人は此の如く師教の恩厚を蒙り、深く如來の矜哀を喜んで、慶喜彌至り至孝彌重く、默止すること能はずして、自らまた筆を取りて、眞宗の要義を列ぬることゝなつた。もとより名利の爲にするに非す、唯佛恩の深きことを喜ふの餘りに出でたことであるから、『信順を因とし疑謗を緣とす』。疑はんものは疑へ、謗るものをして謗らしめよ、何れも緣になりて共に遂には廣大の惠に入ることであらう。かくして前に生れんものは後を導き、後に生れんものは前を訪へ、連續無窮として休止すること無くば、いかに無邊の生死海といへとも終には盡きることいもならう。兎に角末代の僧も俗もこの佛智不思議と敬信すべしと云ひ、最後に華嚴經の偈を引て曰く

若し菩薩ありて種々の行を修行するを見て、善不善の心を起すことありとも菩薩皆攝取せん。

といふを以て結んである、此の如く聖人一代の間、無限絶對の大慈悲を喜び玉ひ、聖道權假定散自力の人のみならず、一切善惡のものすべてと共に、この無限大悲を喜ばんとせられたのである。

開講の日より今日まで七日間、甚た撫雜の至りなから、兎に角現今私か心中に味ひ喜ばして頂くところを、殊にこの『教行信證』の上に喜はせて頂きしました。一向秩序も立たず、まことに慚愧至極ではあるか、自己の信仰、即ち涅槃の眞味、佛教の眞髓を忌憚なく發表させて頂いたことは、まことに感謝に堪へませぬ。

私は御當地に來つて此の如く佛陀の惠を喜はせて頂くことと正に五年、人生、何の時、如何なる事の出來せぬとも限られず、殊にまた佛教界の樣子も大に奮起せねばならぬ氣運に來て居ることゝ考へます。大に佛力の顯はれんとするときは、世界の潮流か著しくなつて來て、必や大なる出來事によりて、一層速かに佛陀の御光を擊發するに至りしまよう、自然そういふ場合には、諸君にも眞劍に盡して頂かねばなりません。

嘆咏

再生

甲之

暑き日暮れ、
ゆらぐ星影、
そよ風運び來
夕べのすがしさ。

疲れし歩みも
身もよみがへり
雲ゐをのぞめば
まどかの光
今、月しろゆ
老いざる光。

狹き野あさるに
八千花盡きぬ。
無常ぞことわり
風吹く草よ
自然の力に。

思ふともなく

八風

固とり何のすぢもなく
其れよりそれと移り來し
夢の末なほ夢にして、
思ふともなく我れ思ひぬ、
今我が卧せるこの所
わが故郷かはた異くにか。

夕日ながむる我が思ひ
其れより其れと移り行く
果は日をさへ忘られて、
思ふともなく我れ思ひぬ、
今我が立てるこの所
人の此の世かはた彼の世かと。

伊藤桐梧

玉くしげ再び逢はむすべなきをすべもあるがに今も思ひつゝ
誰が爲めによそいかざまし綾錦五百重の衣見るに悲しも
御佛の香のけぶりのたえ〳〵に搖ぐ思ひ障ふるすべなし
村肝の心は法に寄せつゝも間なく物思ふ現身われは

『アカネ』より

時報

本年の夏期講習會

例年夏期に入りて、各地に講習會修養會の開催せらるゝは今や殆んど年々の定例たるの感あり。殊に本年は其の增加著しく、單に吾人の見聞を以てするも其數前年に倍し、日本全國苟も法緣有るの地には、必ず其の企を見ざる無きの觀あるは、吾人の大に慶賀に堪えざる所、思ふに是れ一世の人士か靡然として信仰の門に向ひたる證左たる可く、幸に此の氣運にして停止するなくんば全國民が自覺確信の域に到達するも遠きにあらざる可く思はれ、今更大悲矜哀の深きに感泣措く能はざるなり。而して此の氣運のよつて來る淵源を考察するに、佛願力の强緣はもとよりながら、近時年々に急迫する社會生活の困難か不知不識の間に各個人をして自覺の必要を感ぜしめたる力多大なるしと雖も、又以て先輩諸師が熱心なる多年唱導の恩澤は吾人の永く忘却す可らざる所、吾人は此の點に於ては大悲の善巧を謝すると共に、飽迄先輩諸師の恩厚を感銘せんと欲する者なり。そは兎もあれ、三伏盛夏の暑さを大悲清涼の德風に忘れ、名利愛欲の穢れを淸淨甘露の法雨に濯ぎ、人間罪惡の心根を暴露して至心大慈の救淨を仰ぐ。誠に夏期求道の企ては、吾人之を國民の上より見るも、之を大法の上より見るも、最も其時を得たるものにて、佛意の冥慮にも叶ふべく思はる。去りながら物極れば弊生ず、此の如き意味ある會合も一旦眞摯の精神を失ひ、唯單に一時の流行的所謂講習會演說會たるに止まらば、これ畢竟宗敎を玩弄するものにして其の害毒は後來更に恐るべきものあらん、これ實に吾人の憂ふる所也。聊か事の未前に當りて所感を附記する事斯の如し。

本年の夏期傳道

本誌の近角は如斯き各地同胞の熱誠なる御申込により前號所報の日割を以て、本年も夏期傳道に從事する事となり、其第一回は先月二十八日發程にて先づ讃岐高松佛敎會に出席、一週日の日子を以て「聖德太子の十七憲法」及「二門偈」に就きて如來の矜哀を讃仰し奉りたり。蓋し高松は近角有緣の地にて、講習會に出席すること今年にて引き續き三回に及べり。思ふに同地有志諸師の熱誠空しからず、大悲の顯現年毎に彌々著しきものあらん。吾人は近角旅行中の故に、其詳報を掲載する能はざるを惜む。猶ほ同地諸君が常に變はらざる信仰的優遇を給はるは深く感謝し奉る所也。

夫より近角は歸途明石に出て同地同胞諸君の爲に講話をなし、轉じて神戸福間氏宅に立寄り、芳香馥郁たる花園の中に「自然法爾章」を慶歎し奉ること二日、更に河內なる杉崎大愚氏が懇望に牽かれて、同氏の寺にて開講二日間。杉崎君は融通會佛宗の小壯有志者にて、嘗て我が求道學舍にありて熱心法を求め給ひたるの人なり。猶ほ道の序を以て附近なる磯長御廟に詣し又楠公の遺蹟を訪ひ、十三日には江州なる吉田龍誓氏の寺にて法緣を結び、夫より鄕里に歸りて母に待すること二日。本月十六日の未明を以て大日本佛敎青年會夏期講習會に出席すべく、歸京したりき。之を以て今夏第一次の傳道は了はりたるものとす、在京三日間は連日上野不忍池辨天內なる大日本佛敎青年會に出席して「他力敎の淵源」なる題下に、親鸞聖人の他力念佛が實驗的佛敎の眞髓たる所以を述べ、十九日は幸ひ日曜に當りしを以て、特に求道學舍日曜講話を開き、其翌二十日の午後三時新橋驛を發程して再び第二次の傳道に出發したり。而して其夜は橫須賀求道會の爲めに出席し、直ちに同夜の急行列車を以て廣島に向ひ、當時は同市佛敎講習會にて講演中の豫定也。猶ほ讀者諸君の便を計りて今後に於ける傳道豫定日割を掲載すれば次の如し。

本月二十日ヨリ三十一日マデ　廣島講習會及郡部
八月一日ヨリ六日マデ　姫路佛教夏期講習會
同七日ヨリ十日マデ　長濱大谷會講習會
同十三日　岩手縣花卷
同十六日已後　小樽講習會、札幌、岩見澤、室蘭、岩内、旭川、
九月上旬ヨリ中旬マデ　弘前、秋田地方、若松、求道會、

其の後の求道學舍

求道學舍の概況に就きては、一月號に記載する所有りしが、其後幸に佛天の加護を仰ぎて、在舍員一同更に一日の異變もなく、慈光の下無事夏期休暇を迎へ、今や舍生の過半は郷里慈親の膝下に歸りて、温かき家庭に一年の疲勞を慰すると共に、ひたすら法味の愛樂に暑中を忘れつゝあり。唯其間に杉村美之助君が令父の喪中に居給ふの、一事は吾人の反す〳〵も遺察同情に堪えざる處とす。而して今其後の重なる出來事を上ぐれば、四月一日よりは當て學舍にありし碓井老婆親子は、再び學舍の人となり、老婆は稱名念佛踏共に炊事の任に餘念なく子息は本誌の事務に當りて、日々其の職に從ひつゝあり。又文學士葛原逸次郎君は之と時を同じくして出京、再び入舍し給ひ、專門の歴史研鑽の傍、朝夕求道修養の工夫に餘念なく、又永持石之助君は之よりやゝ後れて入舍し給ひ其の專門の醫學研究に從事せられつゝあり。次に久敷く學舍に在りて慕心大悲の恩寵を喜ばれたりし佐伯正君は、此度上州草津溫泉なる學校に教鞭を取らるゝ事となり、先月初を以て住みなれし學舍を辭して其の任地に就かれたり。草津の地、君を得て佛種新に發芽するものあらんか。而して最後に吾人の最も同愛に堪えざるは、富岡教雲、藤本寛の兩君が、彌々本月を以て目出度大學の業を卒へ給ひたる事なりとす。兩君は共に大學當初より終始學舍にありて吾人と共に日夕慈恩の無窮を感謝し給ひたるの人、彌々兩君が社會に出てゝ信仰の偉力を實驗し給ふの時來れりと言ふ可し。吾人は切に兩君の將來に俟つものなり。猶ほ一言の特記すべきものあり。そは他にあらず、從來學舍の勤行は朝時に於てのみ勤修し來りしが、遂に今回機緣熟純して朝暮二時に於て勤修するを得るに到りし事是れなり。あゝ大悲冥々の善巧は、遂に一同の心根に浸潤して期せずして、此の氣運に到らしめ給ふ。吾人は殆んど感謝の辭を知らざる也。

求道會館設立喜捨金受領報告（第三十五回）

一金參圓也　東京　荻野仲三郎殿
一金參圓也　同　東野利孝殿
一金壹百圓也　近江　牧田孫右衛門殿
一金貳拾圓也　福岡　有田廣殿
一金五圓也　札幌　齋藤たい子殿
一金五圓也　福岡　自在丸きく子殿
一金參圓也　福岡　山本とり子殿
一金五圓也　福岡　眞田慶彰殿
一金五圓也　福岡　高田常松殿
一金參圓也　長崎　岡野正理殿
一金壹圓也　長濱　村瀨喜平殿
一金拾圓也　群馬　武藏金吉殿
一金壹圓也　東京　三田やす子殿
一金貳圓也　同　譽田豐吉殿
一金壹圓也　同　宇佐美英太郎殿
一金壹圓也　播磨　法受寺殿
一金五拾錢也　高松　法輪寺殿
小計金百六十八圓五十錢

通計金貳千九百八拾參圓四拾四錢也

右御寄附を忝うし難有奉存候
茲に謹みて奉感謝候也

香月院師肖像及筆蹟寫眞版口繪
和田龍造
今津紹柱共纂

香月院語錄

定價金壹圓（郵稅八錢）
豫約方法 豫約價金七拾錢（郵稅八錢）

信界の明星宗學の巨人香月院深勵講師あるは天下知らざるものなし活る教化を味深さと見做さず。

信仰に觸るゝもの世甚だ稀なり和田今津の二師此に觀るあり香月院師の講錄、法語、示談等普く之を涉獵し信念の機微に觸れ他力教義の幽奥を發揮せる者三百四十條

安心を抄出して本書となす、道德あり譬喩あり教訓あり妙解あり示談あり詩歌あり宗祖の信念

蓮師の道化紹羅せられざるなし苟も信仰の修養に志すもの布教の任にあるもの須らく座右に備ふべきは本書也

製本 堅六寸巾四寸三分 全文四號活字 平假名振假名付 總布クロース表金文字入堅牢洋綴美裝四百五十頁內外

豫約期限七月中 ●期間經過後は定價に復す ●前金に非ざれば豫約と見做さず ●製本九月上旬より著金順により送本

香樹院肖像並墓碑寫眞收口繪 無爲信寺所傳臨末遺狀眞蹟石版摺
眞宗京都中學教授 大須賀秀道先生編纂

香樹院教訓集

製本 堅六寸巾四寸三分 全文四號活字 平假名振假名付 總布クロース表金文字入堅牢洋綴美裝 七百頁內外
定價金壹圓五拾錢（郵稅八錢）
製本期限九月中

申込所 京都市東六條 電話 口座 貳貳五四五 貳貳八五壹 番 法藏館

スカラ

第一卷　第七號

毎月一回一日發行　八月一日發行　七號發行

價一冊十五錢　稅共一錢六十錢

發行所　東京駒込千駄木町五十番地　根岸短歌會

沙彌滿誓の歌（評傳）　三井甲之

暗中獨語（長詩）　三井甲之

文藝管見（評論）　三井甲之

●詩人の生活と製作
●挑發的文學
●排自然主義論の無意義
●藝術は極端なるべし
●時代は推移せり

現代文壇短評　八風甲之

●岩野泡鳴氏の散文詩
●明星竹柏會海の短歌
●獨歩眉山の作
●新聞小説の現狀
●自然派の現狀

小説　星生流る　増田八風

文藝側面觀　増田八風

ゲーゼ作　ゼーゼンハイムへ、夏の夜　鹽山譯

ニイチエ作　墓の歌　鹽山譯

和歌俳句形式比較論　甲之

和歌入門　閑話一束　甲之

俳句調子論　乙字

其他同人の俳句短歌長詩　大須賀乙字

月刊雜誌

靈光

◎本誌は八月一日發行の第二年第八號より擴張發展し內容充實せり

●年金貳拾錢●一ヶ月金三錢五厘●半ヶ年金一錢●一ヶ年金六拾錢●上海外國一部一年三十錢●特別割引部に敷にあらざれば發送せず●前金にて御送金の節は必ず毎回金二錢を添へられたし

▲講話　文學博士　南條文雄

◎親戚朋友間の心得
◎佛教人生の醫療觀　文學士　山內晉卿

▲論說　◎人生問題信仰世界　前田慧雲

◎現世　芝無畏

◎俳句　若榮會

▲感謝　近藤最謹

◎信仰生活の一方面

▲抄錄

◎ありがたい
◎眞の勇敢なるもの　法學博士　新渡戸稻造
◎非分欲望と聰分志望　農學博士　渡邊了空
◎萬物の靈長　法學士　加藤冬亭
◎女子と同情　文學士　北村寅太郎
◎眞の天才　文學博士　佐佐木信綱
◎利他は自利なり　文學士　治部敬三郎
◎茶室の中の心得　文學博士　元良勇次郎
◎精神の修養　文學士　田中王堂
◎明治の自覺　文學博士　村井弦齋
◎親切が第一の事

▲彙報
◎臨風忌◎芳墨◎臨寒◎神戸たより◎姫路たより◎大連たより◎德山たより◎はがきたより◎編輯たより◎新刊紹介

本誌は佛教青年會佛教婦人會其他の聯合機關として發刊せるものにして修養信仰の好指針にして家庭の好伴侶なり

發行所　神戸市中山手通四丁目　振替口座一〇五一〇番　靈光社

賣捌所　京都油小路御前通上ル　振替口座四一一三番　興教書院

近角常觀著（近刊之豫定）

增補　信仰之餘瀝　定價貳拾錢　郵稅貳錢

近角常觀著（再版準備中）

人生と信仰　定價貳拾五錢　郵稅貳錢

近角常觀校訂（再版）

冠頭　歎異鈔　一册郵稅共七錢（定價五錢郵稅二錢）但三册までは郵稅貳錢

發行所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

近角常觀著（第四版）

懺悔錄　定價貳拾錢　郵稅貳錢

發行所　東京市本郷區巻木町二丁目二十一番地　森江分店

賣捌所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

規定

一、本誌は毎月一回一日發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一册
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便局」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治四十一年六月廿八日印刷
明治四十一年七月一日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所　求道發行所
東京市神田區表神保町
大賣捌所　東京堂

前號要目

求道

◎信樂

感謝

◎石見傳道◎宿緣◎眞摯の人◎誓の信仰

◎未見の友◎惡人正機◎頓入の信◎告別

講話

◎如來選擇の願心　近角常觀

告白

◎松嶋殉難故中村長谷部兩候補生の遺簡

▲兩候補生遺影（寫眞版）

◎故吾一道兄の鄉里を訪ねて　有田廣

歌謠

◎勇士をとぶらふ（新體詩）　三井甲之

◎挽歌（短歌）　增田八風

時報

石見九州方面傳道◎松本田甚直江津傳道

◎求道學舍紀念日◎夏期傳道日割

求道第五卷第七號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十一年七月一日發行（毎月一回一日發行）

東京市神田區土手町三ノ一、三光堂印刷